

千葉市馬場遺跡（第2次）

- 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

2019

千葉市教育委員会
株式会社 ノガミ

ち　ば　し　ば　ば　い　せ　き

千葉市馬場遺跡（第2次）

- 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

2019

千葉市教育委員会
株式会社 ノガミ

例　言

1. 本書は、千葉市稻毛区園生町 125-1 外における宅地造成に伴う馬場遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び整理作業は千葉市教育委員会が主体者となり、土地所有者の委託を受けた株式会社ノガミがこれを支援した。
3. 発掘調査の期間・面積・担当者は下記のとおりである。

期　間：平成 31 年（2019）4 月 1 日～令和元年（2019）5 月 31 日

面　積：781.2 m²

担当者：白根義久（千葉市埋蔵文化財調査センター 主査）

調査員：長谷川秀久（株式会社ノガミ 埋蔵文化財調査部 調査員）

4. 整理作業及び報告書作成は長谷川が担当し、長谷川則子の協力を得た。
5. 整理期間は令和元年 6 月 1 日から同年 9 月 27 日までである。
6. 写真撮影は遺構が齊藤泰洋、遺物は長谷川秀久が行った。
7. 本書の執筆・編集は長谷川秀久が行い、第 1 章 1 節は白根が執筆した。
8. 出土資料・調査記録等は千葉市埋蔵文化財調査センターで保管・管理している。
9. 発掘調査から報告書刊行まで、次の方々や諸機関のご指導・ご協力を賜った。なお、石器・石質の同定については橋本勝雄氏、貝類の一部の種別同定は西野雅人氏にご指導、ご教示を賜った。ご芳名を記して感謝の意を表します。

小澤政彦 上守秀明 篠原正 清水克彦 鈴木徹 鈴木徳雄 谷旬 有限会社小川重機

沼南測量設計株式会社 地域考古学研究会 公益財団法人千葉県教育振興財団図書室

千葉縄文研究会

凡　例

1. 本書に使用した座標は世界測地系に基づく平面直角座標 IX 系で、挿図中的方位記号は座標北を示す。また、土層断面図等で使用した標高の基準面は、T.P. (Tokyo Peil / 東京湾平均海面) である。
2. 土層注記及び土器の色調判断は、『新版 標準土色帖』1993 年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所 色票監修）を基本とした。
3. 挿図の縮尺は、原則、下記のとおりとした。

遺構：竪穴建物跡 1/60、同カマド 1/40、土坑・ビット 1/60、溝跡 1/60

遺物：縄文土器 1/3、古墳時代以降の土器・陶器 1/4、土製品・石製品 1/4、鉄製品 1/2

4. 挿図等に用いた遺構の略記号は下記のとおりである。

竪穴建物跡：SI、掘立柱建物跡：SB、土坑：SK、ビット：P、溝跡：SD、擾乱：K

5. 本書で使用した地形図は、国土地理院発行 2 万 5 千分の 1 地形図「千葉西部」を使用した。

6. 挿図に使用したスクリーントーン及び記号は下記のとおりである。

遺構  …擾乱  …焼土範囲  …柱痕跡

遺物  …赤彩  …黒色処理

7. 遺物写真の縮尺は、3 分の 1 で掲載した。異なる場合は個別に示した。

8. 古墳時代以降の土器・陶器・土製品の遺物観察表の凡例は以下のとおりである。

「残存」分数は円周上の残存割合を示す。なお、実測図の中軸線から口縁部・底部の水平線が離れているものは反転実測を示す。

「法量」単位はcm、g。口径・底径（高台径）は上下端部で計測、丸い外反形状では外端部で計測した。（）は復元値、〈〉は残存値を示す。

「胎土」含有物を示す。白：白色粒子（半透明粒子含む。石英あるいは長石）、赤：赤色粒子（褐鉄鉱ほか）、黒：黒色粒子（鉄ほか）、透：透明粒子（石英）、黄：黄褐色土粒子（土器状あるいはバミス）、白雲：白雲母、黒雲：黒雲母、角：角閃石、骨針：海綿骨針、チャ：チャート、バ：バミス、数値表記は大粒のものの最大粒径、（多）：含有量多量。肉眼による表面観察であるので、含有量は多量のみ示した。

「焼成」掲載した土器・陶器はすべて焼成良好であるので省いた。須恵器については、焼け締りの程度と焼成雰囲気を備考欄に記載した。

「色調」胎：陶器の胎土、釉：施釉陶器の釉発色を示す。

9. 遺物の注記は、調査年度「R1」—遺跡名「パパ」—遺構番号—出土箇所・取り上げ区分・点上げ番号、の順で表記してある。

目 次

第1章 調査と遺跡の概要

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
第3節 調査の方法・経過と基本層序	4

第2章 検出した遺構と遺物

第1節 繩文時代	7
第2節 古墳時代	13
第3節 奈良・平安時代	13
第4節 近世以降	29
第5節 時期不明遺構	32

第3章まとめー調査の成果と課題ー

第1節 繩文時代	41
第2節 古墳時代～奈良・平安時代	43

挿 図 目 次

第1図 周辺道路	2	第19図 第5号堅穴建物跡	26
第2図 馬場道路調査履歴	3	第20図 第5号堅穴建物跡 カマド	27
第3図 基本層序	5	第21図 第5号堅穴建物跡 出土遺物	27
第4図 全体測量図	6	第22図 第1号掘立柱建物跡	28
第5図 第3号堅穴建物跡	7	第23図 第1号掘立柱建物跡 出土遺物	29
第6図 第3号堅穴建物跡 炉	8	第24図 第1号・第2号溝跡	30
第7図 第3号堅穴建物跡 出土遺物	9	第25図 第2号溝跡 出土遺物	31
第8図 繩文時代遺構外 出土遺物	12	第26図 第3号溝跡	31
第9図 古墳時代遺構外 出土遺物	13	第27図 土坑	33
第10図 第1号堅穴建物跡	14	第28図 土坑・ピット 出土遺物	35
第11図 第1号堅穴建物跡 カマド	15	第29図 ピット	36
第12図 第1号堅穴建物跡 出土遺物	17	第30図 加曾利E式系統の断面形態の標準的な変化	40
第13図 第2号堅穴建物跡	19	第31図 加曾利 II 期(Ⅲ～V群土器) E IV 期文様表出手法 模式図	40
第14図 第2号堅穴建物跡 カマド	19	第32図 「日本先史土器の繩紋」掲載の土器(山内1979)	40
第15図 第2号堅穴建物跡 出土遺物	21	第33図 梶山類型(隆線系)の変化	41
第16図 第4号堅穴建物跡	22	第34図 梶山類型(沈線系)の変化	42
第17図 第4号堅穴建物跡 カマド	23		
第18図 第4号堅穴建物跡 出土遺物	24		

挿 表 目 次

第1表 第3号堅穴建物跡出土土器観察表	9	第4表 第3号堅穴建物跡出土貝類同定結果	11
第2表 第3号堅穴建物跡・繩文時代遺構外 出土土器観察表	10	第5表 古墳時代遺構外出土土器観察表	13
第3表 第3号堅穴建物跡・繩文時代遺構外 出土石器観察表	10	第6表 第1号堅穴建物跡出土土器観察表	16
		第7表 第1号堅穴建物跡出土土器観察表	18
		第8表 第1号堅穴建物跡出土鉄製品観察表	18

第9表	第1号堅穴建物跡出土器観察表	18	第17表	第1号掘立柱建物跡ピット計測表	28
第10表	第2号堅穴建物跡出土土器観察表	20	第18表	第1号掘立柱建物跡出土土器観察表	29
第11表	第2号堅穴建物跡出土土器観察表	21	第19表	第2号構跡出土土器観察表	31
第12表	第2号堅穴建物跡出土土器観察表	21	第20表	近世遺構出土土器観察表	31
第13表	第2号堅穴建物跡出土土器観察表	21	第21表	土坑計測表	32
第14表	第4号堅穴建物跡出土土器観察表	25	第22表	土坑・ピット出土土器観察表	35
第15表	第5号堅穴建物跡出土土器観察表	28	第23表	ピット計測表	39
第16表	第5号堅穴建物跡出土土器観察表	28	第24表	小中台周辺中期の住居構造一覧	43

図版目次

図版1	3.SI05 カマドAセクション(西から)	7.P13Aセクション(南西から)
1.北区全景(北東から)	4.SI05 カマド遺物出土状況(北から)	8.P16Aセクション(南西から)
2.中央区全景(北東から)	5.SI05 カマド完掘状況(南から)	図版13
図版2	図版9	1.P24Aセクション(南西から)
1.南区全景(南西から)	1.SB01 完掘状況(北から)	2.P42Aセクション(南西から)
2.テストピットAセクション(北西から)	2.SB01 P-01Aセクション(東から)	3.P44・45Aセクション(西から)
	3.SB01 P-02Aセクション(東から)	4.P56Aセクション(西から)
図版3	4.SB01 P-03Aセクション(南東から)	5.P77Aセクション(南東から)
1.SI01 完掘状況(南東から)	5.SB01 P-04Aセクション(南東から)	6.P115Aセクション(西から)
2.SI01 Bセクション(東から)	6.SB01 P-05Aセクション(北東から)	7.P123Aセクション(東から)
3.SI01 Bセクション(東から)	7.SB01 P-06Aセクション(東から)	8.P129Aセクション(北東から)
4.SI01 カマドA・Bセクション(東から)	8.SB01 P-07Aセクション(東から)	図版14
5.SI01 カマド完掘状況(南東から)	図版10	第3号堅穴建物跡出土遺物
図版4	1.SD01 完掘状況(南東から)	遺構外出土遺物
1.SI02 完掘状況(南から)	2.SD01 Aセクション(南東から)	図版15
2.SI02 Bセクション(南東から)	3.SD02 完掘状況(南東から)	古墳時代遺構外出土遺物
3.SI02 完掘状況(南から)	4.SK01 完掘状況(東から)	第1号堅穴建物跡出土遺物
4.SI02 カマドBセクション(南から)	5.SK02Aセクション(北から)	図版16
5.SI02 カマド完掘状況(南から)	6.SK03 完掘状況(西から)	第1号堅穴建物跡出土遺物
図版5	7.SK04 完掘状況(南から)	第2号堅穴建物跡出土遺物
1.SI03 完掘状況(南西から)	8.SK05Aセクション(南西から)	図版17
2.SI03 遺物出土状況(南西から)	図版11	第4号堅穴建物跡出土遺物
図版6	1.SK06Aセクション(南西から)	図版18
1.SI03 東区 完掘状況(北東から)	2.SK07・08・09Aセクション(南東から)	第5号堅穴建物跡出土遺物
2.SI03 Bセクション(南西から)	3.SK10Aセクション(南から)	第1号掘立柱建物跡出土遺物
3.SI03 炉A・Bセクション(南東から)	4.SK11Aセクション(北から)	第2号構跡出土遺物
4.SI03 炉完掘状況(南西から)	5.SK12Aセクション(南から)	近世遺構外出土遺物
5.SI04 Bセクション(南東から)	6.SK13Aセクション(南西から)	第3号土坑出土遺物
6.SI04 焼土検出状況(南から)	7.SK14Aセクション(南西から)	第10号ピット出土遺物
7.SI04 カマドAセクション(東から)	8.SK15 完掘状況(南から)	第58号ピット出土遺物
8.SI04 カマド遺物出土状況(南から)	図版12	第111号ピット出土遺物
図版7	1.SK16 完掘状況(東から)	図版19
1.SI04 完掘状況(南から)	2.SK17Aセクション(南から)	1.第3号堅穴建物跡出土貝類①
2.SI04 遺物出土状況(南西から)	3.PO3Aセクション(南東から)	2.第3号堅穴建物跡出土貝類②
図版8	4.PO4Aセクション(西から)	
1.SI05 完掘状況(南西から)	5.PO5Aセクション(北西から)	
2.SI05 Aセクション(北西から)	6.PI1Aセクション(北西から)	

第1章 調査と遺跡の概要

第1節 調査に至る経緯

平成30年8月2日付けで、ポラスガーデンヒルズ株式会社（以下「事業主」という。）から、宅地造成を計画している千葉市稻毛区園生町125番1他（面積866.85m²）について、「埋蔵文化財発掘の届出について」が千葉市教育委員会教育長あてに提出された。試掘の結果、堅穴建物跡が検出されたため、同年8月29日付け30千教埋セ第171号にて、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

同年11月2日付けで、事業者から「埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」が提出され、同年11月9日付け30千教埋セ第269号にて千葉県教育委員会教育長あて報告し、同年11月16日～11月27日の日程で千葉市埋蔵文化財調査センターが確認調査を実施した。

その結果、縄文時代堅穴建物跡などが検出されたため、同年12月13日付け30千教埋セ第327号にて、調査面積のうち781.20m²を本調査対象範囲として継続協議が必要の旨、事業者あてに通知した。

再度協議の結果、対象範囲全城を記録保存のための本調査を実施することになり、平成31年3月20日付けで、土地所有者から「埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」が提出され、同年4月1日付け31千教埋セ第22号にて埋蔵文化財発掘の報告を行い、依頼者の委託を受けた株式会社ノガミの支援のもと、千葉市教育委員会が主体者となり、同年4月1日から発掘調査を開始した。

第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡

（1）遺跡の位置

本遺跡は千葉市北西部の稻毛区にあり、旧下総国千葉郡に属する。旧千葉郡の園生村・宮野木村・小中台村三村の境界付近に位置し、東西南北の道の辻でもある。南西約2.5kmには東京湾岸の旧海岸線に臨み、周辺の標高22m～28mを測る平坦な下総台地に立地する。この台地は網目状の谷津が開削し、いくつかの台地に分割されている。

本遺跡付近には花園川（汐田川）があり、上流は北の宮野木支谷と南の園生支谷に分岐している。本遺跡はこの両支谷から分岐した谷津頭が突き合う位置にあり、つまり、分水界に遺跡が所在する。

今回の調査では縄文・奈良・平安時代の集落跡を確認し、昭和62年度（1987）の調査では古墳時代の集落跡も確認されているので、縄文・古墳・奈良・平安時代の遺跡の動向についてまとめておく。『千葉県埋蔵文化財分布地図』に基づいて、前記、宮野木支谷と園生支谷周辺の遺跡をリストアップする。

縄文時代 29遺跡を数える。時期別では早期10、前期4、中期14、後期13、晚期3であり、早期と中期、後期にピークがある。早期は宮野木支谷の南方右岸に分布し、当該期のみの存続や地点貝塚が目に付く。その他は対岸の小中台の台地縁辺や、園生支谷の左岸（南岸）に散在する。

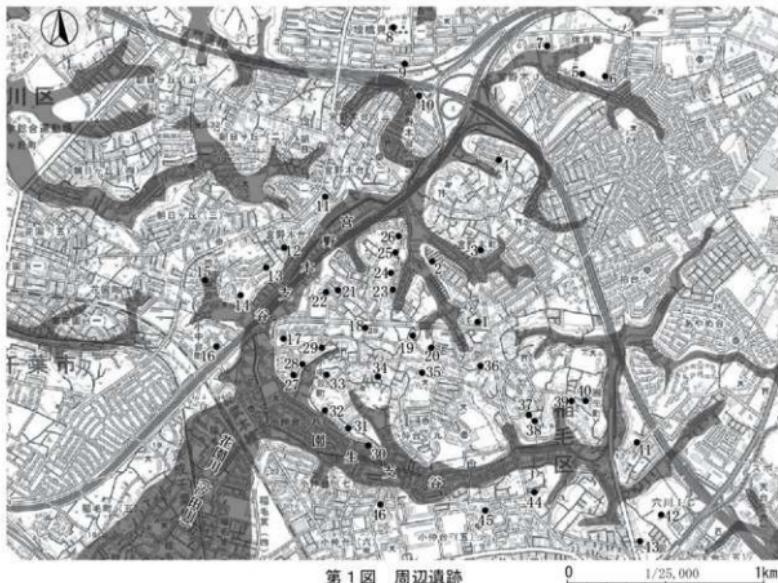
中期は小中台の台地に分布を広げ、両支谷の上流・奥にも分布する。この傾向は後期にも継承される。園生貝塚は中・後期の環状貝塚であり、なお、水系は異なるが（花見川水系）、国史跡横橋貝塚は後・晚期の馬蹄形貝塚である。

古墳時代 集落跡は13遺跡を数える。時期別では前期2、中期1、後期6であり、大半が後期・6～7世紀の集落である。小中台台地と園生支谷の上流に集約している。

古墳（群）は13件を数える。墳丘が現存する古墳は中・近世の塚・墳墓である可能性もあるが、小中

台A遺跡における円墳周溝の確認を見ると、そのいくつかは古墳であり、また、削平されて埋没しているものも推定される。築造時期が判明しているものはほとんどない。その中で、本遺跡の北北東1.5km足らずにある房地古墳は、発掘調査の結果、前期初頭の方墳と判断されている。また、南方150mにある西街道古墳は前方後円墳が推定されており、西方400mにある道合古墳では石室が確認されている。また、小中台台地の半島状先端、城山には城山横穴がある。

奈良・平安時代 奈良時代7遺跡、平安時代8遺跡と、古墳時代に比べると分布範囲が縮小する。しかし、古墳後期から継続する本遺跡、小中台A遺跡、下田遺跡のほかは、再度または新たに興った集落であるので、各地区集約化された動きとみることもできるだろう。



第1図 周辺遺跡

- | | | | |
|----------|------------|-------------|-----------|
| 1 馬場遺跡 | 13 烏込東貝塚 | 25 宮野木原第2遺跡 | 37 高崎遺跡 |
| 2 宮野木原遺跡 | 14 烏込貝塚 | 26 宮野木原古墳群 | 38 高崎古墳群 |
| 3 木名遺跡 | 15 烏込西貝塚 | 27 小中台B遺跡 | 39 拝ノ内遺跡 |
| 4 定原遺跡 | 16 エゴダ遺跡 | 28 球原古墳群 | 40 下田遺跡 |
| 5 房地遺跡 | 17 谷津台遺跡 | 29 牛尻古墳 | 41 勝田田遺跡 |
| 6 房地古墳 | 18 小中台A遺跡 | 30 城山横穴 | 42 園生貝塚 |
| 7 房地北遺跡 | 19 新堀込遺跡 | 31 城山古墳 | 43 向原遺跡 |
| 8 梶橋貝塚 | 20 東の上東貝塚 | 32 城山遺跡 | 44 孤塚西遺跡 |
| 9 草原遺跡 | 21 牛尾舛遺跡 | 33 城山跡 | 45 女子高裏遺跡 |
| 10 草原古墳群 | 22 牛尾舛古墳 | 34 東ノ上貝塚 | 46 向原遺跡 |
| 11 堀原古墳群 | 23 宮野木原南遺跡 | 35 道合古墳 | |
| 12 鳥喰東遺跡 | 24 東海道遺跡 | 36 西街道古墳 | |



第2図 馬場遺跡調査履歴

(2) これまでの調査

本遺跡の調査は今回が2地点目となる。先の調査は今回の南側、園生町交差点付近の県道磯辺・茂呂町線建設に伴って行われたもので、昭和62年度(1987)に千葉県文化財センターによって発掘調査が実施された(萩原編1989)。旧石器・縄文・古墳・奈良・平安・江戸時代の遺構が確認されている。

旧石器時代 立川ローム第VI層上部、始良・丹沢バニス(AT)直上を層準とする文化層が確認された。ブロックは西側の谷津(宮野木支谷)に近い位置にあり、ナイフ・櫓・石刀・削器・彫器・ビエス・エスキュー・石核・剥片・石鍼などからなり、使用痕のある円鏧を伴う。隣接する小中台A遺跡・新堀込遺跡の成果とともに、当時不明確であったAT前後の石器群の変化を層位的に示すものとなった。

縄文時代 中期後半・加曾利III式(新)段階の竪穴住居跡1軒が東側の谷津頭(園生支谷)方向で、時期不明の袋状土坑1基が西側谷津付近で発見された。土器以外では土器片錐が比較的多く出土しており、ほかに石皿や打製石斧がある。遺構外では早期後半・条痕文系茅山式・中期前半・阿玉台式土器が検出されている。

古墳時代 後期・6世紀中葉と7世紀前葉の竪穴住居跡が各1軒、遺跡中央で確認された。前者は一辺3.9mの小規模住居、後者は同6.0mの中規模住居であった。ともに軽石、後者では土玉が検出されている。

奈良・平安時代 8世紀中葉・第2～第3四半期、同後半・第3～第4四半期、9世紀中葉・第2～第3四半期の各3軒が確認された。各期ともに、遺跡中央(2軒)と西側谷津付近(1軒)に位置している。また、集落の消長に沿って出土須恵器の生産地(東海産、常陸産、在地・千葉市土気地区産)組成が変化しており、生産・流通の変遷が指摘されている。

江戸時代 遺跡西端の谷津地形に沿って伸びる溝である。今回調査の第1号溝跡はこの北側延長上に当たる。西側斜面の傾斜がきつい断面逆台形であるが、上端幅は最大2.5mあり、単なる地境溝ではない。遺構外遺物では泥面子(面打〔めんちょう〕・芥子面〔けしめん〕)、青白磁菊花形紅皿がある。

第3節 調査の方法・経過と基本層序

(1) 調査の方法

調査区は南西から北東方向19m、南東から北西方向41mのほぼ長方形、面積は781.2m²である。表土・堆土は調査区内に仮置きを余儀なくされることから、表土量を加味し調査区を3分割して南西側から北東方向に調査を行う。現地調査段階では調査区を南西部・中央部・北東部と呼称した。

表土はバックホー(0.4m³)文化財仕様バケットとクローラーダンプ(4t)を用い、遺構確認面である第Ⅲ層のソフトローム上面まで掘り下げた。遺構確認は鋤簾・手箕を用いた人力にて精査を行い、切り合い関係に留意しながら遺構プランをマーキングした。

調査区全体を網羅するよう世界測地系第IX系を用い10m方眼グリッドを設けた。補足として任意杭を打設し、測量の基準とした。高さの基準となるベンチマークは調査区北西部に1ヶ所(標高28.200m)設置した。方眼グリッドには東西方向に算用数字1から5を付し南北方向にアルファベットAからDを付した。各グリッドの呼称は北西角杭名を適用する。

遺構は主軸方向や切り合い関係などに留意し土層セクションベルトを設け移植縛・手箕を用いた人力で調査を行った。遺物は各遺構ごとに取り上げた。堅穴建物跡は土層観察用ベルトで区分し4分割して取り上げた。それぞれ時計回りに1区から4区まで番号を付した。各遺構に対し重要と思われる遺物は3次元測量を行った。遺構の実測は20分の1を基調に必要に応じて10分の1、40分の1で行う事とし遺構確認図は100分の1で、遺構全体測量図は20分の1で作図した。

写真撮影は35mmモノクロームフィルムカメラ及び2426万画素のフルサイズデジタルカメラを用い、各遺構ごと調査順に記録した。

整理作業 遺物の注記にはインクジェットプリンター(注記マシン)を用いた。土器の接合にはセルロース系接着剤(セメダインC)を用い、補強にはエポキシ系樹脂(バイサム)を用いた。遺物実測は手測りで作図した。作成した遺構・遺物図面はAdobe Photoshop CCへ読み込み、Adobe Illustrator CCを用いてデジタルトレースを行った。遺物の写真撮影は2426万画素のフルサイズデジタルカメラを用いた。Adobe InDesign CCで編集を行い、入稿データを作成した。

(2) 調査の経過

発掘調査は調査準備期間を経て、平成31年4月1日から令和元年5月31日まで実施した。以下日を追って記載する。

平成31年

3月25日 調査範囲を設置し表土除去作業に着手する。便宜上調査区南西部から行う。安全柵の設置を行う。

28日 表土除去作業を終了。堅穴建物跡が3軒と溝2条のほか土坑・ピットが確認された。

30日 発掘機材の搬入及び仮設トイレの搬入を行う。

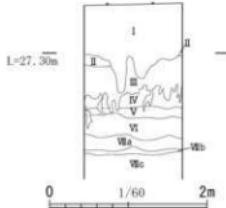
4月1日 作業員着任。休憩所及び機材置き場の設置、排土山の養生作業を行う。遺構確認作業を行う。

- 2日 遺構精査に着手。SI01・02から着手する。セクションベルトを設け移植鋸を用い精査を行う。
調査区内に測量基準杭を設置する。
- 3日 遺構確認図を作図する。遺構精査作業を継続する。
- 8日 土坑及びピットの完掘写真撮影を行う。SI02の精査作業を継続する。
- 13日 土坑・ピットの精査作業を継続。SI01・02・03の完掘写真撮影を行う。
- 18日 調査区南西部の調査が終了し、調査区中央部との表土の切り返し作業に着手する。
- 24日 切り返し作業が終了。遺構確認作業を行う。堅穴建物跡2軒と土坑・ピットが確認される。
- 25日 遺構精査作業に着手する。SI04・05から着手する。基準杭の設置を行う。
- 26日 明日からの連休に備え、安全対策及び遺構の養生作業を行う。
- 令和元年
- 5月2日 本日より調査を再開する。SI04・05の精査を継続する。土坑・ピットの精査作業に着手する。
- 6日 全体測量図の作図に着手。土坑・ピットの精査の継続。テストピットの設置を行う。
- 11日 調査区中央部の精査が終了。
- 13日 北東部との表土切り返し作業に着手。
- 15日 表土の切り返し作業が終了。
- 16日 遺構確認作業を行う。堅穴建物跡は確認されず、土坑とピットが検出された。
- 17日 各土坑にセクションベルトを設定し精査作業に着手。
- 23日 調査区中央部の完掘全景写真的撮影。全体測量図の作図を行う。機材の片付け作業を行う。
- 24日 全ての調査が終了する。
- 27日 調査区の埋め戻し作業に着手。
- 31日 埋め戻し作業を終了。重機の撤収。安全柵の撤去を行い全ての業務が終了する。

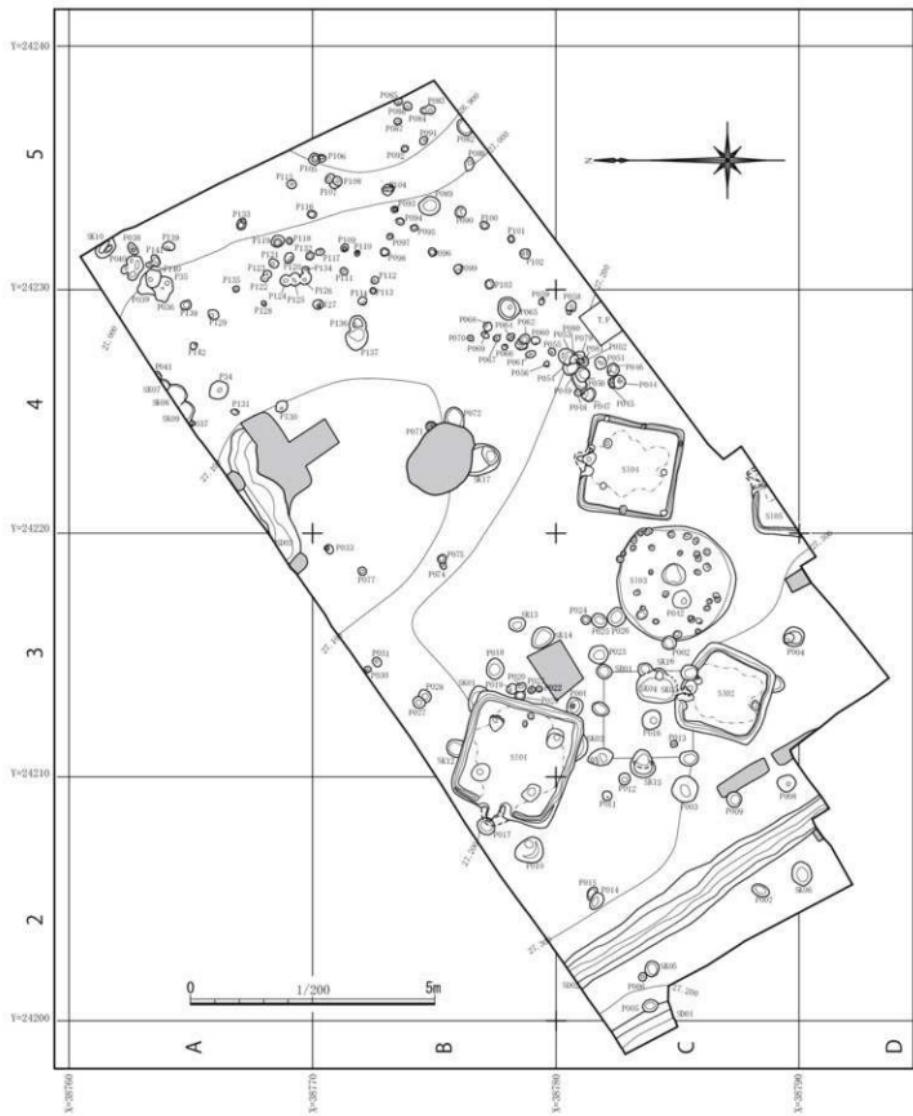
(3) 基本層序

I層は現耕作土。II層は漸移層である。新期テフラは耕作により削平されているものと思われ、調査区の隨所で確認できる。III層はソフトローム層、V層は北総台地における第1暗色帯に相当するものか、VI層は姶良・丹沢バミス(AT)を含む層。VIIa層は第2暗色帯a層、VIIb層は同b層、VIIc層は同c層である。

- I層 10B2/3 黒褐色土 ローム粒子ブロック約1~5mm多量、堆土粒子・ブロック約1~3mm多量、炭化ブロック約1~3mm多量、やや繊り有、やや粘性有。
- II層 10B3/4 喬褐色土 ロームブロック約1~3mm多量、赤褐色スコリア極微量、繊り有、やや粘性有。
- III層 10B4/6 黒色土 ハードロームブロック約1~20mm多量、黒色スコリア極微量、繊り有、やや粘性有。
- IV層 10B4/6 黒色土 III層よりやや暗い、黒色スコリア多量、赤褐色スコリア微量、繊り強、やや粘性有。
- V層 10B4/6 黑色土 IV層よりやや明るい、黒色スコリア多量、赤褐色スコリア微量、繊り強、やや粘性有。
- VI層 10B4/4 黑色土 V層よりやや暗い、黒色スコリア多量、赤褐色スコリア微量、明褐色土ブロック約5~10mm多量、繊り強、やや粘性有。
- VIIa層 10B3/4 喬褐色土 VI層よりやや暗い、黒色スコリア少量、赤褐色スコリア微量、灰白色スコリア微量、繊り強、やや粘性有。
- VIIb層 10B4/3 にじみ黒褐色土 VIIa層よりやや明るい、赤褐色スコリア微量、褐色土ブロック約1~3mm多量、繊り強、やや粘性有。
- VIIc層 10B3/4 可視褐色土 VIIb層より暗い、黒色スコリア・赤褐色スコリア微量、褐色土ブロック約1~3mm多量、繊り強、やや粘性有。



第3図 基本層序



第4図 全体測量図

第2章 検出した遺構と遺物

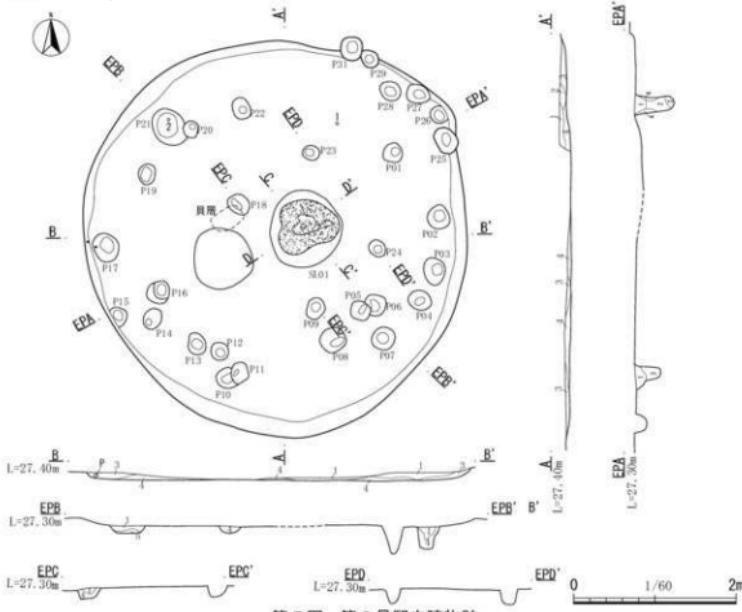
第1節 繩文時代

(1) 壁穴建物跡

第3号壁穴建物跡

遺構 位置:C3グリッド。重複関係: 第2・42号ピットに削平を受ける。平面形状: ほぼ円形。主軸方向: S-42°-W。規模: 長軸4.93m、短軸4.85m、床面までの深さ最大で0.13m。覆土: ロームブロックを少量含む暗褐色土が自然堆積し、4層に分層された。炉: 床面中央部やや北東側に位置する。規模は長軸94cm、短軸87cm、深さ28cmを測る。断面U字状。覆土は焼土と炭化ブロックが多く含む暗褐色土が堆積し、7層に分層された。底面は著しく焼土化し、焼土は最大で深さ7cmに及ぶ。焼土下に焼土と炭化物を多く含む暗褐色土が確認された。その暗褐色土直下には被熱痕が確認されている。柱穴: 床面中央部から壁面にかけて同心円状の広がりを見せ、31基が検出されている。北東部の壁面のわずかな突出部分には6基(P25～P31)の柱穴が存在し、出入り口施設に伴う柱穴と思われる。また、炉を中心に特徴的な4本の柱穴(P09・18・23・24)が確認された。床: 炉と出入り口施設の間にわずかに硬化面が確認された。

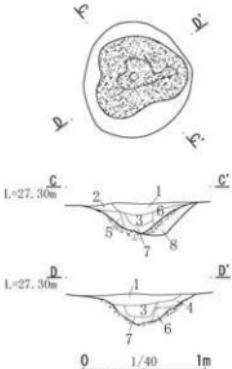
遺物出土状況: 床面直上で微量検出されている。また、P18南西部に貝混土層が確認された。貝は廃棄された様相であった。所見: 炉の修復もしくは作り替えが確認されており、同心円状に広がる柱穴群から上屋の建て替えが想定されるが、柱穴の新旧関係が不明であり、また残存する壁穴は非常に浅く判然としない。



褐色土ブロック5～15mm中量ややありやや粘性あり
1層10R2/4暗褐色土ローム粘子・ブロック1～5mm多量燒土粘子・ブロック1～2mm少 量黒色土ブロック5～20mm中量ややありやや粘性あり
2層10R3/4暗褐色土ローム粘子・ブロック1～10mm多量燒土粘子・ブロック1～2mm少 量黒色土ブロック5～10mm中量ややありやや粘性あり
3層10R3/4暗褐色土ローム粘子・ブロック1～5mm多量燒土粘子・ブロック1～2mm少 量黒色土ブロック5～10mm中量ややありやや粘性あり
4層10R3/4暗褐色土ローム粘子・ブロック1～20mm多量燒土粘子・ブロック1～5mm少 量黒色土ブロック5～10mm中量よりありやや粘性あり
S163W07 16 18 21
1層10R3/4暗褐色土ローム粘子・ブロック1～5mm多量灰化ブロック1～3mm微量灰化

S163W

1層10R2/1黑色土ローム粘子・ブロック1～3mm多量燒土粘子・ブロック1～3mm中量灰化ブロック1～5mm微量 黑色土ブロック1～20mm中量ややありやや粘性あり
2層10R2/1黑色土ローム粘子・ブロック1～3mm多量燒土粘子・ブロック1～3mm少量黑色土ブロック5～10mm多 量ややありやや粘性あり
3層10R3/4暗褐色土ローム粘子・ブロック1～5mm多量燒土粘子・ブロック1～3mm少量灰化ブロック1～5mm微 量黑色土ブロック5～20mm多量ややありやや粘性あり
4層10R3/4暗褐色土ローム粘子・ブロック1～10mm多量燒土粘子・ブロック1～3mm微量灰化ブロック1～3mm微 量黑色土ブロック5～30mm多量ややありやや粘性あり
5層10R3/4暗褐色土ローム粘子・ブロック1～5mm多量燒土粘子・ブロック1～3mm微量灰化ブロック1～5mm微 量黑色土ブロック5～10mm中量ややありやや粘性あり
6層10R3/2黑色土ローム粘子・ブロック1～5mm多量燒土粘子・ブロック1～3mm微量灰化ブロック1～5mm微 量黑色土ブロック5～10mm中量ややありやや粘性あり
7層10R3/4暗褐色土ローム粘子・ブロック1～3mm多量燒土粘子・ブロック1～10mm中量灰化ブロック1～5mm少 量
8層10R3/4暗褐色土ローム粘子・ブロック1～10mm多量燒土粘子・ブロック1～5mm多量灰化ブロック1～5mm微 量黑色土ブロック5～10mm中量よりありやや粘性あり

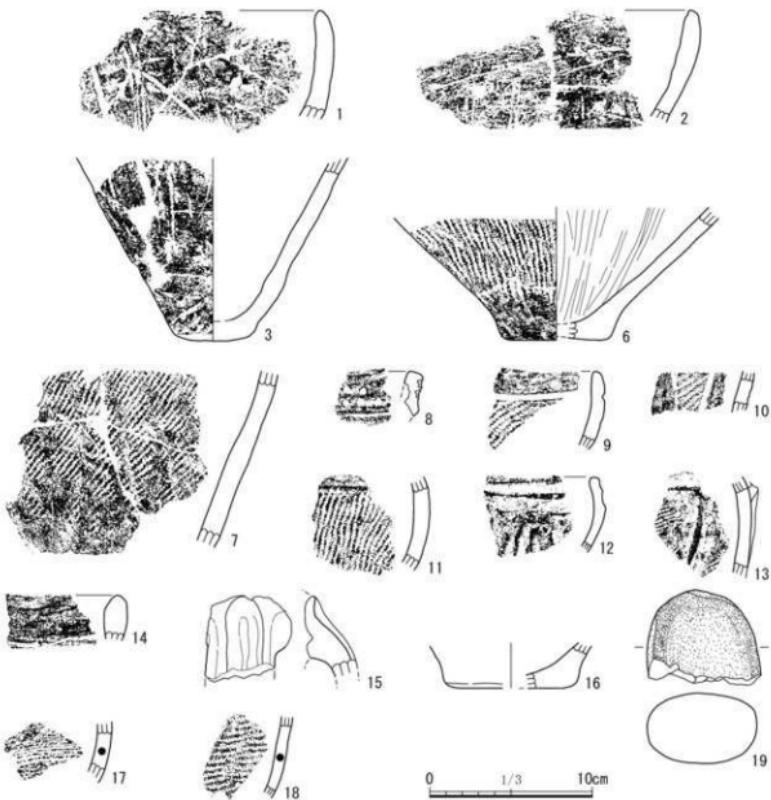


第6図 第3号竪穴建物跡 炉

遺物 土器

1～3は粗製の深鉢である。粗い器面に沈線で雑然と施文されている。渉獣の結果、適例ではないが成田市(旧大栄町)新山台遺跡002号住相粗製土器を見出した(岡田1986)。6・7は縄文地文深鉢の体下半である。単節縄文RL斜位・タテ回転施文である。8は口縁直下に浅く沈線を引き二列の円形刺突文を施す。口縁は肥厚を呈する。9は口縁部が沈線で区画され、体部には縄文が施される。図右辺に沈線が確認できることから横位連携弧線文土器であろう。口縁無文部、沈線、内面は丁寧にナデ調整されている。縄文RLタテ回転施文。10は体部懸垂磨消縄文で地文(意匠部)は縄文RL綴紙施文である。11は区画線で口縁部無文帶を描出す。微隆起線脇上辺はナデ調整され下位は浅い沈線がひかれる。縄文施文は微隆起線頂部に及ぶ。縄文RL斜位回転施文する。12口唇部は内外両面へラによる器面調整ではぼ丸形を呈する。緩い波状を呈する口縁部を巡る隆線脇をナデにより二条の回線を作出する。ナデ回線には擦痕がみられる。下位は浅くナデ逆「U」字文を描出す。薄手(5～6mm)で地文は判然としない。瓢形土器か。13は口縁部の横位区画線に懸架文(舌状U字文/円文)の外側描線上端が接合し隆起状を呈する。断面が三角形を呈する微隆起線でモチーフを描出す。微隆起線脇は浅い沈線のナゾリと軟質なナデ調整が看取される。14は肥厚する無口縁で直口微かに外反する。口唇部は丸形を呈する。浅い沈線が看取できる。15は橋状把手で太回線状ナデ調整が顕著である。両耳壺か。16は底径が小さく反上がる底部形態を呈す。17は貝殻沈線文土器。貝殻を深浅に動かす。5条の貝殻沈線文を横位に施す。内面はナデ調整。微量の纖維含有。18は纖維含有土器である。図端に沈線を看取できる。内面は丁寧なナデ調整である。黒浜式。

第3号竪穴建物跡の時期は9～15を基に加曾利EIII式新段階期(加曾利EIV式に隣接的)である。



第7図 第3号竪穴建物跡出土土器観察表

第1表 第3号竪穴建物跡出土土器観察表

番号	遺構番号	部位	質的範文・測量等	色調	釉土	型式	備考
1	SI03 1区-N01	口縁部	粗い、凹凸調査、無な式縁	暗黒褐色	白色粘・非色粘・黄褐色粘・砂粒・透明粘・尚閃石	加曾利丘皿式	1~3回 一全体
2	SI03 4区-N05	口縁部	粗い、凹凸調査、細く浅いV字縁で大形な丸子	暗黒褐色	白色粘・黄褐色粘・非色粘・砂粒・透明粘・尚閃石	加曾利丘皿式	
3	SI03 1区-N05、 4区	側部~ 底部	体中位直下沈窓。下位無文。底面はやや擦らむ丸底。 底位沈窓。無文字	黄褐色	白色粘・非色粘・黄褐色土粘・非色粘・砂粒・透明粘・半透明粘・ 骨粉・尚閃石	加曾利丘皿式	
6	SI03 4区	底部	体下干窓文。底部尤才今	暗褐色	白色粘・黄褐色土粘・非色粘・砂粒・ 骨粉・透明粘・尚閃石	加曾利丘式	
7	SI03 4区、	側部	窓文、一部擦痕	暗褐色	白色粘・黄褐色土粘・非色粘・砂粒・ 骨粉・透明粘・尚閃石	加曾利丘式	
8	SI03 1区~一部	口縁部	口縁底下沈窓横窓4条+竹管刺突2例	暗赤褐色	黄褐色土粘・砂粒・透明粘・白色粘	加曾利丘皿式	
9	SI03 1区~一部	口縁部	口縁丸り丸形、口縁底下沈窓+幅広沈窓+十字窓刺突2例 タテ丁寧	明黄褐色	白色粘・非色粘・黑色粘・尚閃石	加曾利丘皿式	

第2表 第3号竪穴建物跡・縄文時代遺構外出土土器観察表

番号	遺構番号	部位	装飾施文・調査等	色調	胎土	型式	備考
10	S103.1.4区-柄	胴部	沈綴黎文文→夥支文周。研磨	褐色	白色粘・黄褐色土粘・砂粒・透明粘・角閃石	加曾利EⅢ式	
11	S103.1.1区-柄	胴部	照葉文・輪綱文・沈綴→圓文底。斜化。やや軟質施文	暗褐色	白色粘・黄褐色土粘・砂粒・赤色粘・透明粘・角閃石・黑色粘・角閃石	加曾利EⅢ式	
12	S103.1.1区-柄	口縁部	口縁下横位凹縫→弧状凹縫。口沿部丸形。ヘラナゲ調整	暗褐色	白色粘・砂粒・角閃石	加曾利EⅢ式	
13	S103.1.1区-柄	腹側部	施綴接合部の起伏。微擦軽擦側縫ナゾリ・圓文底。タテ・斜化。	暗褐色	白色粘・黄褐色土粘・赤色粘・透明粘・砂粒・角閃石・角・背針	板山類型	
14	S103.1.1区-柄	口縁部	口沿部丸形。把厚。内面横擦痕。縫口縁へ剥り	暗褐色	白色粘・黄褐色土粘・砂粒・透明粘・赤色粘	加曾利EⅢ式	
15	S103.4.4区-柄	把手	耳耳文?無文の把手。指添回線内ナゲ痕跡。黏土板指合計付	赤褐色	白色粘・黄褐色土粘・赤色粘・黑色粘・透	加曾利EⅢ式	
16	S103.1.1区-底部	底部	無文。ナゾリ形→浅い凹状押捺立上に並り 平坦な表面。底径9.0cm	黄褐色	白色粘・赤色粘・砂粒・透明粘・黄褐色土粘・角閃石	加曾利E式	
17	S103.1.1区-柄	胴部	豎向打条痕施文と貝貝条痕文	暗褐色	褐色少少・白色粘・砂粒・透明粘・角閃石	無式	
18	S103.4.4区-柄	胴部	施綴合有 縄文B.タテ・沈綴、内面平滑な調整	暗褐色	白色粘・砂粒・透明粘・角閃石・背針	無式	

縄文時代遺構外出土土器

1	S101.カマド	胴部	施綴合有 施綴縫・縫面状・内面具條条痕	暗褐色	白色粘・黄褐色土粘・透明粘・赤色粘・砂粒	出戸上層	
2	P05	胴部	施綴合有。羽衣状縄文	褐色	白色粘・砂粒・透明粘・黑色粘・角閃石	無式	
3	P108-底	胴部	施綴合有。縄文B底	暗褐色	黄褐色土粘・黑色粘・砂粒・透明粘・白色粘	無式	
4	S104	口縁部	刺突文(棒状工具。斜め下方)→圓文→沈綴。口沿部茶褐色丸形	茶褐色	黄褐色土粘・砂粒・赤色粘・透明粘	加曾利EⅢ式	
5	S109	口縁部	口縫高拵厚→一横縫→一張式沈綴→焼通。口沿部丸形。内面横擦痕	暗褐色	白色粘・赤色粘・黄褐色土粘・砂粒・透明粘・角・背針	加曾利EⅣ式	
6	S104-底	口縁部	口縫高拵厚→圓文Bヨコ縫→沈綴ナゾリ。口沿部丸形。内面横擦痕	褐色	白色粘・黑色粘・透明粘・角閃石	加曾利EⅣ式	
7	S101	口縁部	口縫高拵厚→圓文・糸紋沈綴→張式沈綴。口沿部丸形。内面横擦痕	褐色	白色粘・赤色粘・黄褐色土粘・砂粒・黑色粘・透明粘	加曾利EⅢ式	
8	P120-底	口縁部	粗折口縫→切跡部打縫ナゾリ→圓文。口沿部丸形。内面横擦痕	暗褐色	白色粘・赤色粘・黑色粘・透明粘・砂粒	加曾利EⅣ式	
9	P72-底	口縁部	口縫高拵厚無文→側隙打縫痕→沈綴・圓文。口沿部水平内面横・面取り	赤褐色	黄褐色土粘・赤色粘・透明粘・黑色粘・背針	加曾利EⅣ式	
10	素採	口縁部	高張口縫→一切跡部打縫・側隙打縫→上・側縫ナゾリ→側縫に重なる圓文EⅡ打縫打痕施文	暗褐色	白色粘・黄褐色土粘・赤色粘・透明粘・黑色粘・透明粘・角閃石・背針?	加曾利EⅣ式	
11	P05-柄	胴部	曲隆帯→沈綴→不明	黃褐色	白色粘・赤色粘・砂粒・透明粘・黑色粘	加曾利EⅢ式	
12	P56-柄	胴部	側隙打痕ナゾリ・圓文→沈綴ナゾリ	暗褐色	白色粘・黄褐色土粘・透明粘・赤色粘・角・背針	板山類型	
13	S101	胴部	逆U字形。左右2沈綴の太さが違う→圓文	赤褐色	白色粘・砂粒・赤色粘・透明粘・角閃石・黄褐色土粘	加曾利EⅣ式	
14	S104W035	胴部	地文圓文→横指ナゾリ→くずれた低式沈綴	明黄褐色	白色粘・赤色粘・透明粘・砂粒・黑色粘	加曾利EⅣ式	
15	S102	口縁部	半溝縫→横指次第深め→圓文打痕。口沿部平坦。内面横擦痕	褐色	白色粘・黄褐色土粘・赤色粘	加曾利E I式	
16	P23-底	土製円盤	圓錐線なし研磨。斜底平行沈綴	褐色	白色粘・赤色粘・黄褐色土粘・砂粒・透明粘・角閃石・黑色粘	加曾利E式	
17	S105-柄	土製円盤	打縫打つ欠き	暗褐色	白色粘・黄褐色土粘・砂粒・黑色粘・透明粘・赤色粘	加曾利E式	
18	S104W035	土製片	地文圓文→横指ナゾリ→くずれた低式沈綴	明黄褐色	白色粘・透明粘・砂粒・黑色粘	加曾利EⅣ式	
19	S102	土器片	無文口縫→低式ナゾリ。半円状突起	黑褐色	白色粘・黄褐色土粘・砂粒・赤色粘・透明粘・角閃石	加曾利E式	
20	S104	土器片	無文→沈綴→圓文	赤褐色	白色粘・赤色粘・砂粒	加曾利E式	

石器

19は磨石類である(橋本勝雄2014)。端部破片ではあるが全体の形状は橢円形を呈する。被熱資料で一部赤化・黒変している。表裏に摩耗痕、端部に敲打痕がある。片面中央に凹み痕の一部がみられる。石材は安山岩である。長さ6.2cm・幅6.9cm・厚さ4.3cm・重量264.05g(現存値)。

第3表 第3号竪穴建物跡・縄文時代遺構外出土石器観察表

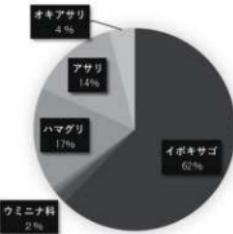
発見番号	遺構番号	石器種	材質	重量	備考
19	S104W032	磨石類	安山岩	264.05g	鬼怒川系
21	P03-底	輕石(浮石)	輕石	85.23	漂着石・伊豆新島産
22+23	測量区-底	剥片	黑曜石	2.36g	白石器剥片。高尾山産

貝類

P18付近の床面上に貝が堆積していた。P18の覆土中には含まれていなかった。貝種同定の結果、イボキサゴ、ウミニナ科、アカニシ、ムシロガイ科、シオフキ、ハマグリ、アサリ、オキアサリを確認した(分類にあたって西野1999を参照した)。大部分の貝は破碎されており、個体数の算出は不能である。ハマグリとアサリに大・中形個体を見るが、各種とも総じて小形個体が主体を占めており、稚貝も含まれているようである。中でも、イボキサゴが突出しており、この点は近隣の東海道遺跡の縄文時代中期貝層と類似する(小林2019)。また、アカニシが被熱黒化していることにも注意したい。

第4表 第3号堅穴建物跡出土貝類同定結果

	種名	重量(g)	割合(%)	所属
堅足網	イボキサゴ	169.30	62.2	殻幅1.6cm~0.8cmの小形・微小個体である。
	ウミニナ科	4.61	1.7	殻高3.5cm~2cmを測る。
	アカニシ	0.80	0.3	小鏡片であるが、被熱痕跡があり黒化している。
	ムシロガイ科	1.20	0.4	殻高1.5cm前後の個体。
二枚貝網	シオフキ	1.51	0.6	オキアサリから剥離されたもの。殻長4cmほどと推定されるもの1個体のみ。
	ハマグリ	44.87	16.5	殻長5cmを超える中形個体もあるが、極めて3cm前後の小形個体が多い。殻高2cm以下のものも見られる。
	アサリ	38.83	14.3	殻長5cm弱の大形個体から1.6cmの小形個体までばらつく。
	オキアサリ	11.04	4.1	殻長4.1cmの大型個体のほかは熱縮破片。
合計		272.19	100.00	

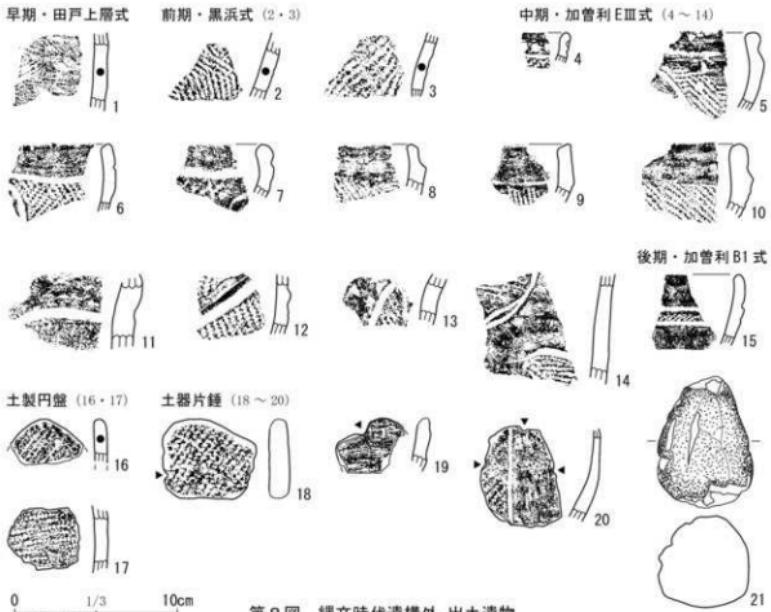


(2) 縄文時代遺構外

出土状況から積極的に遺構関連遺物としては判断しなかった。

1(SI01)は纖維含有土器である。器面は横位区画に細い平行沈線を横・斜位に幾何学的な区画文施す。内面は貝殻条痕である。早期中葉戸戸上層の体部片とおもわれる。2(P05)は微量に纖維含有する羽状縄文土器である。3(P108)は微量の纖維含有土器である。4(SK04)は口縁直下に幅狭く円形削突を施す。沈線文で区画以下縄文施文する。5(SK09)は口縁部無文帶を隆帶で作出し幅広でナデによる四線を描出す。弧線文を明瞭な沈線で描出す。ナゾリによるバリが顕著である。横位連携弧線文系土器であろう。施文順位は縄文(RL斜位・ヨコ)→磨消→沈線・四線ナデ調整。やや軟質性施文か。6(P04)は内湾波状口縁を呈する。幅広無文口縁を沈線で画し弧状沈線で文様描出す。乾燥がすすんだタイミングで施文しナデ調整する。施文順位は縄文(RLヨコ・タテ)→磨消→弧状沈線・脇のナデ(バリ)の調整・沈線ナゾリ。横位連携弧線文系土器であろう。7(SD01)は口縁部無文帶を隆帶で作出する。沈線一条描出し界線とする。横位連携弧線文系土器であろう。縄文RL。8(P120)はカマボコ状を呈する隆帶で口縁部を形成し屈曲表現で体部との界線を描出す。挟まれた短頸部に凹線文を廻らす。凹線内はナデ調整され一部擦痕が看取できる。屈曲部隆線脇まで縄文施文されるが縄文原体は判然としない。9(P72)の口唇部は内傾面取を施し外縁は圧延粘土を被覆し丁寧に成形する。幅広く研磨した口辺部を微隆起線で画し体部には筋の細かい縄文LR斜位を微隆起線脇まで施文する。微隆起線脇は浅く細い沈線でナデを施し側線効果を描出す。硬質な状態で施文ナデ調整する。10(表探)口縁部無文帶をカマボコ状隆帶で作出する。凹線にナデ調整三角状を呈する微隆起線で区画する。微隆起線脇まで縄文施文する。単節縄文LR縦回転施文。11(P05)は幅広扁平隆帶で脇を浅く幅広沈線でナデ調整する。縄文は判然としない。厚手な作りである。12(P56)は隆帶(カマボコ状で頂部を扁平にナデ調整する)両脇をやや軟質な状態でナゾリを繰りかえす。梶山類型(隆線系)の体部破片であろう。縄文RLヨコ。13(SD01)は対向U字文土器。体部下半施文域文様であろう。意匠内縄文は不詳。14

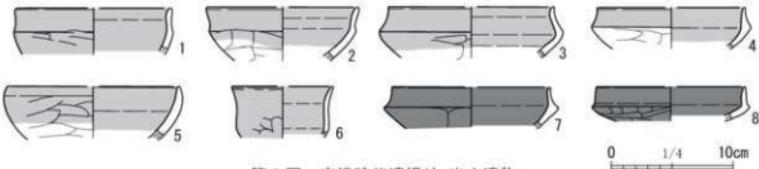
(SI04)は体部中位括れ部で施文域上位文様と下位文様の軸がずれた幅広の磨消部を作出する。器面には横位に指ナデ調整の形跡を残す。U字状対向文の体部片であろう。意匠外線は崩れを生じている。意匠内は無節し斜位回転施文である。器面上には横位に手指によるナデ調整の痕跡(浅い溝状を呈する粘土の起伏)を残す。15(SK02)は鉢形土器である。器表面が研磨され光沢をもった口辺部破片である。やや内傾する平坦な口唇部を形成する。幅広の研磨口縁と研磨分離帶を挟んで上下に横帯文を作出する。横帯文の密接施文を回避した形態であろう。図下端に横位の沈線が看取できる。加曾利B1式鉢形土器か。内文はなし。小破片のため区切り文など単位文様の有無は不明。(器表光沢+暗茶褐色+器表下橙褐色)は「焼べ焼き」の特徴であるとされる(鈴木2013)。当該土器片もこれに適応する。器厚7~8mm。16(P23)は竹管による平行沈線施文土器片で周縁を丁寧に研磨調整する。微妙だが微かに纖維含有する。土製円盤である。重量は11.40gである。17(SI05)は周縁の調整が粗いつくりの土製円盤である。21.95g。18(SI04)は撚糸文Lを地文とする土器片で周縁を丁寧に研磨調整する。重量は46.14gである。19(SK02)は微隆起線脇をナデ調整する土器片を再加工する。切り込み周縁を含め丁寧に研磨調整する土器片鍤だが欠損品のため形状は不明である。重量は12.87gである。20(SK04)は幅広磨消帶で浅い沈線で画す。周縁打ち欠き。重量は24.80gである。21(P03)は磨石類である。磨耗痕をのこすもの。(狹義の磨石)I類に相当する(橋本2014)。材質は軽石。白色で純度が高く比重の小さい軽石は伊豆新島産であるという(新井1983)。新井の言に従えば、これらの軽石は新島から海流に乗って最寄りの海岸に漂着したものと推定される(橋本2016)。85.23g。22・23(写真図版)は旧石器時代の可能性のある剥片である。高原山産と推定される黒曜石の剥片(2点)である。



第8図 繩文時代遺構外 出土遺物

第2節 古墳時代

今回の調査地点では古墳時代と確定できる遺構は検出されていない。ただ、古墳時代後期の土師器が一定量検出された。特に、第1号竪穴建物跡の覆土中に多く含まれていた。図示したのはそれらの一部である。1～6は赤彩された杯類で、6世紀前半に位置づけられる。7は黒色処理の須恵器杯身模倣杯であるが、シャープな作りで、同様の帰属か。8は体部が浅い器形で、6世紀末葉～7世紀初頭に位置づけられる。前者は昭和62年度調査のSI 6(6世紀中葉)に、後者は同じくSI 7(7世紀前葉)と同調するものであろう。



第9図 古墳時代遺構外出土遺物

第5表 古墳時代遺構外出土土器観察表

測定番号	記述	種類	器種	残存	口径	底面	底径	重量	胎土	成・整形の特徴	色調	備考
1	SI01-4IK	土師器	杯	口縁～体上半部	(12.8)	(3.8)	—	12.5	白・赤・黒・砂	外面部ケズリ。内外面口10mm/4に深い凹部	7.5mm/4に深い凹部	赤絵微杯
2	SI01-1IK	土師器	杯	口縁～体上半部	(12.8)	(4.4)	—	18.5	白・赤・黒・透・黄・砂	外面部ケズリ。内外面口10mm/4に深い凹部	10mm/4に深い凹部	黒縞微杯
3	SI01-4IK	土師器	杯	口縁～体上半部	(13.6)	(4.2)	—	15.7	白・赤・透・砂	外面部ケズリ。内外面口10mm/4に深い凹部	10mm/4に深い凹部	黒縞微杯
4	SI01-1IK	土師器	杯	口縁～体上半部	(12.0)	(3.4)	—	18.0	白・赤・透・砂	外面部ケズリ。内外面口10mm/4に深い凹部	7.5mm/4に深い凹部	赤絵微杯
5	SI01-2IK	土師器	杯	口縁～体上半部	(14.0)	(4.7)	—	29.6	肌理細かい。角・白・赤・透	外面部ケズリ。内外面口2.5mm/4に深い凹部	2.5mm/4に深い凹部	黄絵微杯
6	SI01-1IK	土師器	杯	口縁～体上半部	(8.2)	(4.2)	—	11.4	透・白・黄・砂	外面部ケズリ。内外面口5mm/6に深い凹部	5mm/6に深い凹部	
7	SI01-1カマド	土師器	杯	口縁～体上半部	(12.8)	(3.4)	—	14.0	角・白・赤・透・黄	外面部ケズリ。内外面口10mm/3に深い凹部	10mm/3に深い凹部	赤絵微杯
8	SI01-1IK	土師器	杯	口縁1/6～体上半部	(12.6)	(2.8)	—	21.6	肌理細かい。骨針・白・赤・透	外面部ケズリ。内外面口10mm/4に深い凹部	10mm/4に深い凹部	赤絵微杯

第3節 奈良・平安時代

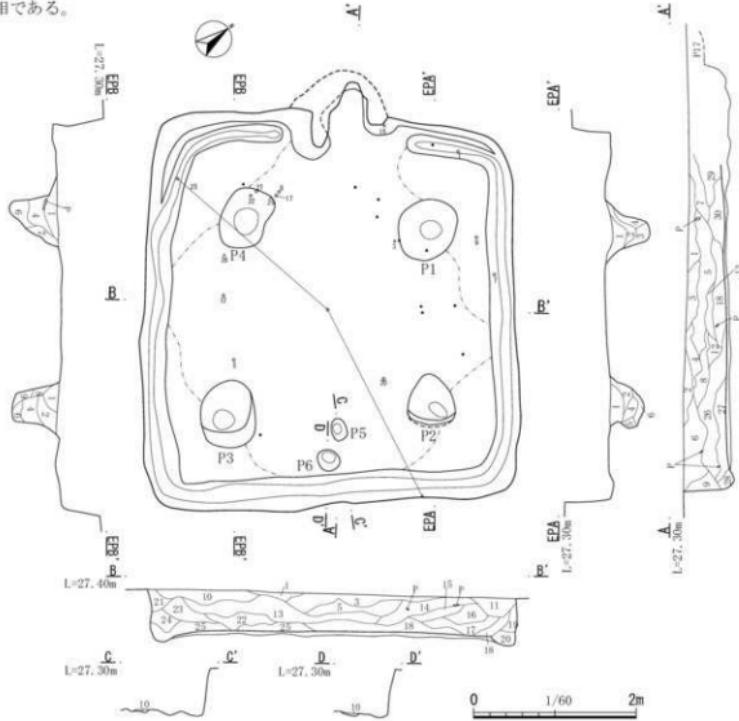
(1) 竪穴建物跡

第1号竪穴建物跡

遺構 位置：B2・B3・C3グリッド。重複関係：第2・12号土坑を切り第1号土坑・第17号ピットに削平を受ける。平面形状：ほぼ正方形。規模：主軸方向4.82m、副軸方向4.53m、床面までの深さ最大で0.52m。主軸方向：N=70°W。覆土：ロームブロックを多く含む暗褐色土が堆積する。上層は自然堆積であるが、中・下層においては人為堆積を呈し、31層に分層された。壁：垂直に立ち上がる。カマド：北西壁面中央部に位置する。遺存状態は比較的良好である。壁面を約50cm掘り込んで構築されている。構築材には細砂粒を多く含む暗褐色粘土が使用され、袖部は最下部に丁張状に地山を残しその上に外側から内側にかけて盛土する形で構築されたことがうかがえた。壁面のラインに沿って火袋部が存在し、火床部もほぼ同位置である。火床部の手前側には炭化物層が確認された。火袋部は幅約55cmを測り、わずかに掘り詰められ、床から南西壁にかけて明瞭に焼土化する。煙道は住居跡北西壁

から北西方向に約40cmの位置に確認され、底面は火袋部から緩やかに立ち上がる。右袖中層より土師器杯が上向きに据えられた形で検出された。周溝：カマド部分を残し壁面直下に確認された。柱穴：主柱穴4基(P1～P4)と南東壁直下に入り口施設に伴うと思われる柱穴2基(P5・P6)が確認された。主柱穴は平面形が不整円形を呈し、柱根跡が明瞭ではない。主柱穴脇の床面にはローム土が堆積することから、主柱穴は抜き取られた可能性がある。床：カマド手前側より主柱穴の内側にかけて著しく硬化する。床面中央から北西に寄った所に被熱痕跡が1か所確認された。掘方：四隅が顕著に掘り窪められている。中央部で約5cm、四隅下で約15cm～25cmを測る。

遺物出土状況：ほとんどの遺物は覆土中層から上層にかけて確認されており、床面上からの検出は非常に少ない。所見：床面に被熱痕跡が1か所確認されるが、中下層の覆土から見て焼却の痕跡は確認されない。また、中下層の出土遺物が微量なことから廃絶時に使用に耐えうる用具は持ち去られた様相である。



第10図 第1号竪穴建跡

- 1層 10YK3/4暗褐色土ロームブロック1～5mm多量地土粒子・ブロック1～5mm少量ややありやや粘性あり
- 2層 10YK3/4暗褐色土ローム・ブロック1～5mm多量地土粒子・ブロック1～3mm微量炭化ブロック1～2mm微粒量ややありやや粘性あり
- 3層 10YK3/4暗褐色土ローム・ブロック1～15mm多量地土粒子・ブロック1～3mm微量炭化ブロック1～3mm微量ややありやや粘性あり
- 4層 10YK3/4暗褐色土ローム・ブロック1～20mm多量地土粒子・ブロック1～5mm微量炭化ブロック1～3mm微量ややありやや粘性あり
- 5層 10YK3/4暗褐色土ローム・ブロック1～10mm多量地土粒子・ブロック1～5mm少量炭化ブロック1～10mm微量ややありやや粘性あり
- 6層 10YK3/4暗褐色土ローム・ブロック1～10mm多量地土粒子・ブロック1～3mm少量炭化ブロック1～5mm少量ややありやや粘性あり
- 7層 10YK3/4暗褐色土ローム・ブロック1～10mm多量地土粒子・ブロック1～5mm少量炭化ブロック1～2mm微粒量ややありやや粘性あり
- 8層 10YK3/4暗褐色土ローム・ブロック1～5mm中量地土粒子・ブロック1～2mm微量炭化ブロック1～5mm少量ややありやや粘性あり

遺物 1～3は武藏型甕。口縁部は外反するもので、3の端部は肥厚して外面がわずかに段状を示す。4は白色粒子を多量に含む粗い胎土が特徴。5は口縁部や肩部内面のヨコナデがていねいで、焼成も堅緻である。4・5ともに胴部外面をタテケズリする在地産(房縁型)の甕。6・7は常盤型甕で、肩部(7)外面には叩き痕が残り、内面はナデ調整され当て具(拳?)の痕跡は不明瞭である。小型甕(8～12)はいずれも煤・焦げの痕跡を残し(一部、二次焼成か)、煮炊具として用いられたものと推察する。

15は内外全面赤彩のクロロ杯で、全面に被熱痕跡を示し、煤が付着する。口縁部から体部の3分の1周は欠損し、破断面が摩耗していることから、打ち欠かれたものと考えられる。内外面の煤付着範囲は傾斜しており、この打ち欠き部分上端と残存口縁端部を結ぶ傾斜に対応するようである。

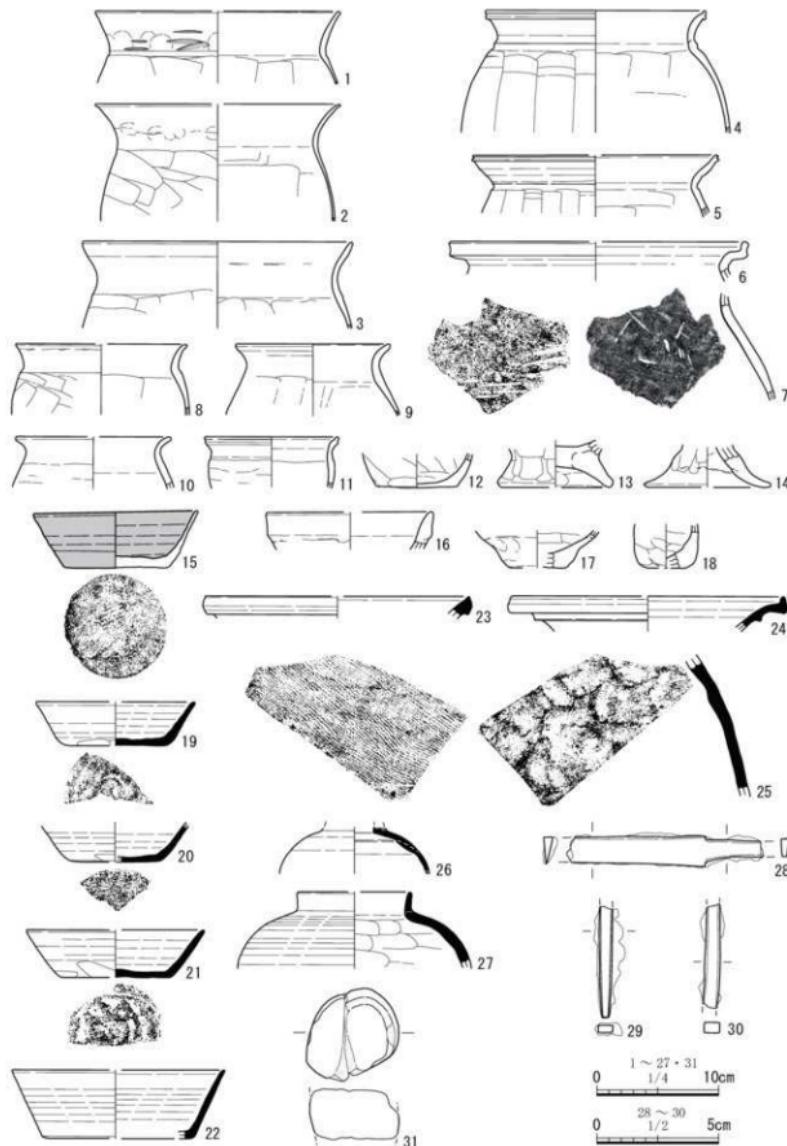
16～18の手捏ね土器の胎土も甕4と小型甕に近似し、これらは在地生産であることを示唆する。中に海綿骨針や角閃石を含むものがあり、製作地の手がかりとなるかもしれない。13の台付甕⁹はチャートを含む胎土が特徴である。

須恵器杯(19～21)は南比企(推定)・新治など多産地のものが含まれるが、底径が大きく、浅い器形を示し、底面はヘラ切り離し痕が見られる。22は大きく深い器形と肌理の細かい胎土の特徴から、湖西窯産と思われる。26は頸部三段成形の壺肩部破片である。外面全面に濃緑色の自然釉が厚く掛かる猿投窯産の原始灰釉陶器で長頸瓶と推定される。

時期 甕(煮炊具)は土器器のみの組成である。甕4の類例は昭和62年度調査のSI 5(8世紀第3・4四半期)で出土している。武藏型甕・赤彩ロクロ杯・須恵器杯・原始灰釉壺の組成・形態から、下総国府編年(松田2001)の3a期、8世紀後半に位置づけられる。

第6表 第1号竪穴建物跡出土土器観察表

掲載番号	日記	種類	器種	残存	口径	器高	底径	重量	胎土	成・整形の特徴	色調	備考
1 No. 2, 25K	土8625	甕	口縁1/3～ 肩部	(20.0)	(5.9)	—	128.1	角・白・赤・透 黄・砂	外縁部左ケズリ。 口縁ケズリ工具当 たり痕	SI8625 6 明赤釉	武藏型	
2 ガマド	土8625	甕	口縁1/4～ 肩部	(20.0)	(9.6)	—	137.7	角・白・赤・透 黄・砂	外縁部左ケズリ	SI8625 6 明赤釉	武藏型	
3 No. 6, 14K	土8625	甕	口縁1/5～ 肩部	(22.0)	(7.1)	—	61.1	角・白・赤・透 砂	外縁部左ケズリ。 口縫記肥厚・段状	SI8625 6 明赤釉	武藏型	
4 P03	土8625	甕	口縁1/4～ 肩部	(18.0)	(10.0)	—	132.3	白(多)・赤・黒 透・砂	外縁ケズリ。口縫 部内側、端部折損し、 外縁部禿	SI8625 6 黒釉		
5 No. 17, 31K	土8625	甕	口縁1/4～ 肩部	(20.0)	(5.1)	—	91.2	骨質・白・赤・黒 透・砂	外縁ケズリ。内面 ヨコナデついでない。 口縫部内側、端部灰 褐色	SI8625 6 明赤釉		
6 41K	土8625	甕	口縫部 1/10	(24.0)	(3.2)	—	33.1	白質・白(多)・赤 透・砂	口縫部受け口状	SI8625/2 黄褐色	葉穂型 被熱焼化	
7 No. 8	土8625	甕	肩部	—	(8.8)	—	97.1	白質(多)・白(多) 赤・透・砂	外縁叩き一ナザ。内 面ナデ	SI8625/3 に赤い裏面	葉穂型	
8 No. 25	土8625	甕	口縫1/6～ 肩部	(14.0)	(5.8)	—	33.3	白(多)・赤・黒 透・黄・砂	外縁左下・左上ケズ リ。	SI8625/4 に凹い 内面胴部膨らむ着 色	小型甕	
9 No. 9	土8625	甕	口縫1/6～ 肩部	(12.4)	(5.9)	—	36.1	骨質・白(多)・赤 透・黄・砂	外縁下ケズリ	SI8625/4 に凹い 内面	小型甕 被熱焼化	
10 21K	土8625	甕	口縫1/5～ 肩部	(12.4)	(4.2)	—	36.2	白(多)・赤・透 (砂)	外縁左ケズリ	SI8625/5 6 赤 内: SI8625/1 黒褐	小型甕 外縁被熱赤化顯著、内 面黒化	
11 P02	土8625	甕	口縫1/5～ 肩部	(11.0)	(4.2)	—	23.1	白(多)・赤・透 砂	外縁ケズリ。口縫 部端部丸み上げ。沈線	SI8625/6 線	小型甕	
12 No. 18	土8625	甕	底脚完 合付	—	(2.8)	6.6	93.2	骨質・白(多)・赤 透・砂	底脚左ケズリ。底 面不規則方向ケズリ	SI8625 6 明赤釉	小型甕 外縁保有者	
13 218.	土8625	台付甕	結合部・脚 台脚1/3	—	(3.9)	9.0	97.8	チ・白・赤・黒 黄・透・砂	外縁左ケズリ。内面 脚部ミガキ	SI8625 6 明赤釉		



第12図 第1号竪穴建物跡 出土遺物

第7表 第1号竪穴建物跡出土土器観察表

測量番号	注記	種類	器種	残存	口径	器高	底径	重量	紹土	成・整形の特徴	色調	備考
14	1区	土師器	灰陶	脚付鉢	—	(3.5)	(10.4)	40.6	白・赤・黄・透・砂	外表面ケズリ。脚端部ヨコナダ	DBS/6明赤褐	
15	No.29	土師器	杯	口縁2/3~底既完存	(3.5)	4.6	6.7	184.0	角・黒窯・白・赤・透・砂	外表面底部下端・底面内側にケズリ。内外全面剥離	7.5086.6 紅	口縫流打ち欠きか・内外面剥離・焼付着
16	18区、21区	土師器	平盤ね	口縁既	(13.4)	(3.0)	—	54.7	青・白(多)・赤・透・砂	厚手のつくり。口縁部ヨコナダ	7.5086.4にぶい焼	
17	No.28	土師器	平盤ね	口縁~底既	—	(3.1)	(4.8)	62.1	青・白(多)・赤・透・砂	底面全面剥離か	7.5086.6 紅	
18	3区	土師器	平盤ね	底~追部	(3.6)	(4.4)	34.8	白(多)・赤・黄・透・砂	外表面剥離	DBS/6明赤褐		
19	1区	須恵器	杯	口縁~底既	(13.0)	3.6	(8.4)	35.0	青・白・赤・黒	外表面底部下端にケズリ。底部へと切りかけた脚部ケズリ	2.506/1 黄灰	南北企窓か無口杯
20	No.13	須恵器	杯	底~追部	(3.3)	(8.4)	30.0	(口)青(多)・白(多)・赤・透	外表面底部下端にケズリ。追部を持ち一方向ケズリ	96/灰	新治窯産無口杯	
21	4区	須恵器	杯	口縁~底既	(14.5)	3.9	(9.0)	57.1	白(多)・白(多)・赤・透	体部下端をケズリ。底部へと切りかけた脚部ケズリ	BT/1灰白	新治窯産無口杯
22	No.22	須恵器	杯	口縁1/10~底既	(17.8)	(5.6)	(12.2)	21.8	白・黒	底面ケズリ	1007/1灰	南北企窓か無口杯
23	4区	須恵器	甕	口縁部1/8	(21.6)	(3.8)	—	19.8	(口)青(多)・白(多)・赤・透	口縫部二段。内面口縫端部剥離	BT/1灰白	新治窯産
24	2区	須恵器	甕	口縁部1/6	(22.4)	(3.1)	—	69.5	白・赤・透	口縫端部剥離上げ化。内側剥離	外: 10085/2灰 黄 細	南西窓産か
25	No.14、15・19	須恵器	甕	側部	—	(11.7)	—	375.3	白(～4cm)・多・赤・黒	外表面下段タキ。内面剥離で具(拳手)付ナーフ	DBS/1青灰	地元不明
26	1区	須恵器	甕	底既1/5	—	(3.7)	—	21.6	白(～5cm)・黒	二段成形。外曲厚い自然袖	DB/1灰 袖: 1014/2オーブ 灰	須治窯産 原始輪軸
27	No.21、24	須恵器	知歌甕	口縁1/3~底既	(9.1)	(8.3)	—	125.0	白・青・白(多)・赤・透	内面剥離ナダ	SA/灰	地元不明
												無口・硬質焼成

第8表 第1号竪穴建物跡出土鉄製品観察表

測量番号	注記	種類	器種	残存	長さ	最大幅	最大厚	重量	成・整形の特徴
28	No.23	鉄製品	刀子	先切・茎灰次根	(9.1)	1.3	0.4	11.8	圓周
29	No.24	鉄製品	刀子	茎端上部灰次根	(4.6)	0.6	0.3	4.1	—
30	長	鉄製品	鉗	頭端灰次根	(4.3)	0.6	0.4	4.4	—

第9表 第1号竪穴建物跡出土石器観察表

測量番号	注記	種類	器種	残存	長さ	最大幅	最大厚	重量	材質	成・整形の特徴
31	2区	石製品	戈頭	2片片面研磨	(4.6)	8.1	—	229.5	硬質砂岩 円柱状な 波打たれ跡	須治窯産 原始輪軸

第2号竪穴建物跡

遺構 位置: C3グリッド。重複関係: 第1号掘立柱建物跡P7・第11号土坑を切る。第3号土坑に削平を受ける。平面形状: ほぼ正方形。北東壁がわずかに外に膨らむ。主軸方向: N=20°E。規模: 主軸方向3.65m、副軸方向3.55m、床面までの深さ最大で0.27m。紹土: ロームブロックを多く含む暗褐色土が人為堆積を呈し、2層に分層された。壁: 垂直に立ち上がる。カマド: 北東壁面中央部に位置する。北部が第3号土坑に削平を受けるが、遺存状態は比較的良好である。構築材には細砂粒を多く含む暗褐色粘土が袖外側から内側に盛土する形で堆積する。壁面のラインに沿って火床部が存在し、火袋部はほぼ同位置である。火袋部の幅は約57cmを測る。わずかに掘り窪められた火床部から北西壁にかけて明瞭に焼土化する。周溝: カマド部分を除く壁面直下に確認された。柱穴: 南西壁直下に1基確認された。出入口施設に伴うものと思われる。床: カマド前面から南西壁面にかけて著しく硬化する。掘方: 北隅下と南東壁面下から南西壁面下にかけて顕著に掘り込みが確認される。中央部で約5cm、南西壁下で約20cmを測る。

遺物出土状況:カマド前面から北東部にかけて少量出土している。床面直上の出土遺物は微量である。
所見:床面には焼土痕は認められていないが、覆土と遺物出土の状態から焼却された可能性が指摘される。

S102

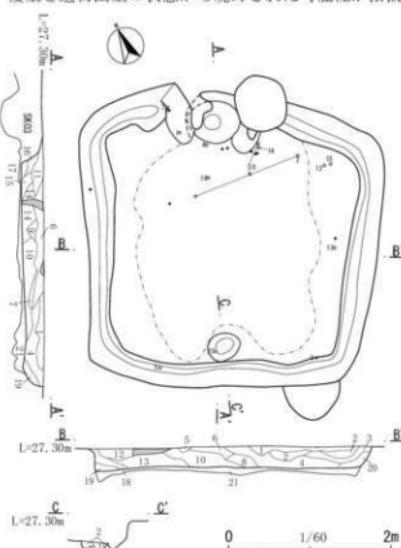
- 1層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～3mm 中量燒土粒子・ブロック 1～3mm 燃燒化ブロック 1～5mm 燃燒量や少やや粘性あり
- 2層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～2mm 多量燒土粒子・ブロック 1～3mm 中量燒化ブロック 1～2mm 少量や少やや粘性あり
- 3層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～2mm 中量燒土粒子・ブロック 1～3mm 中量燒化ブロック 1～3mm 燃燒量や少やや粘性あり
- 4層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～10mm 中量燒土粒子・ブロック 1～5mm 燃燒化ブロック 1～20mm 燃燒量や少やや粘性あり
- 5層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～3mm 多量燒土粒子・ブロック 1～3mm 燃燒化ブロック 1～5mm 燃燒量や少やや粘性あり
- 6層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～5mm 多量燒土粒子・ブロック 1～3mm 少量燒化ブロック 1～5mm 中量や少やや粘性あり
- 7層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～10mm 少量燒土粒子・ブロック 1～5mm 燃燒化ブロック 1～3mm 燃燒量や少やや粘性あり
- 8層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～7mm 少量燒土粒子・ブロック 1～2mm 燃燒化ブロック 1～20mm 燃燒量より強やや粘性あり
- 9層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～3mm 中量燒土粒子・ブロック 1～3mm 少量燒化ブロック 1～15mm 燃燒量や少やや粘性あり
- 10層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～3mm 中量燒土粒子・ブロック 1～5mm 燃燒化ブロック 1～20mm 燃燒量より強やや粘性あり
- 11層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～3mm 中量燒土粒子・ブロック 1～3mm 少量燒化ブロック 1～3mm 燃燒量よりやや粘性あり
- 12層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～3mm 中量燒土粒子・ブロック 1～5mm 燃燒化ブロック 1～3mm 燃燒量や少やや粘性あり
- 13層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～3mm 中量燒土粒子・ブロック 1～3mm 燃燒化ブロック 1～5mm 燃燒量や少やや粘性あり
- 14層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～10mm 少量燒土粒子・ブロック 1～5mm 少量燒化ブロック 1～3mm 燃燒量や少やや粘性あり
- 15層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～5mm 燃燒量や少やや粘性あり
- 16層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～5mm 少量燒土粒子・ブロック 1～5mm 燃燒化ブロック 1～2mm 燃燒量や少やや粘性あり
- 17層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～2mm 多量燒土粒子・ブロック 1～20mm 燃燒化ブロック 1～2mm 燃燒量や少やや粘性あり
- 18層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～5mm 少量燒土粒子・ブロック 1～10mm 燃燒化ブロック 1～10mm 燃燒量なしやや粘性あり
- 19層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～10mm 多量燒土粒子・ブロック 1～2mm 燃燒化ブロック 1～2mm 燃燒量や少やや粘性あり
- 20層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～5mm 少量燒土粒子・ブロック 1～2mm 燃燒化ブロック 1～2mm 燃燒量や少やや粘性あり
- 21層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～15mm 多量燒土粒子・ブロック 1～2mm 燃燒量より強やや粘性あり

S103/01

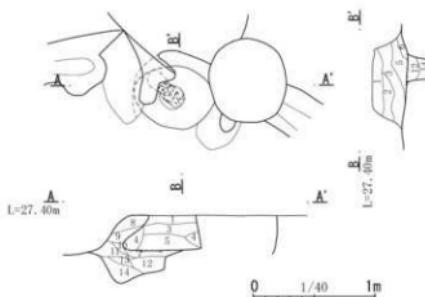
- 1層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～3mm 多量燒土粒子・ブロック 1～2mm 燃燒量黒褐色土ブロック 5～10mm 中量や少やや粘性あり
- 2層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～2mm 中量燒土粒子・ブロック 1～2mm 燃燒量より強やや粘性あり
- 3層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～15mm 多量燒土粒子黒褐色土ブロック 5～15mm 少量や少やや粘性あり

S102 カマド

- 1層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～5mm 中量燒土粒子・ブロック 1～5mm 燃燒化ブロック 3～10mm 多量燒褐色土ブロック 10～30mm 少量の燃燒量ありやや粘性あり
- 2層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～5mm 多量燒土粒子・ブロック 1～5mm 少量褐色土ブロック 5～15mm 多量細砂多量繊維ありやや粘性あり
- 3層 10Y2/3 黑褐色土ロームブロック 1～2mm 少量燒土粒子・ブロック 1～15mm 多量化合物 2mm 燃燒化ブロック 1～30mm 多量細砂多量や少やや粘性あり
- 4層 10Y2/3 黑褐色土ロームブロック 1～3mm 多量燒土粒子・ブロック 1～3mm 少量化化ブロック 1～5mm 多量細砂多量繊維あり
- 5層 10Y2/3 黑褐色土ロームブロック 1～3mm 少量燒土粒子・ブロック 1～3mm 中量化化ブロック 1～3mm 多量細砂燃燒量なしやや粘性あり
- 6層 10Y2/3 黑褐色土ロームブロック 1～3mm 多量燒土粒子・ブロック 1～3mm 中量化化ブロック 1～2mm 多量細砂燃燒量なしやや粘性あり
- 7層 10Y3/4 墓褐色土ロームブロック 1～5mm 中量燒土粒子・ブロック 1～



第13図 第2号竪穴建物跡



第14図 第2号竪穴建物跡 カマド

~ 10 mm少量灰化ブロック 1 ~ 3 mm黒褐色砂砾多量織まりありやや粘性あり
8層 10YR5/4暗褐色土ロームブロック 1 ~ 10 mm多量燒土粒子・ブロック 1 ~ 3 mm少量灰化ブロック 1 ~ 5 mm少量細砂砾多量織まりありやや粘性あり
9層 10YR5/4暗褐色土ロームブロック 1 ~ 2 mm多量燒土粒子・ブロック 1 ~ 3 mm少量灰化ブロック 1 ~ 2 mm少量細砂砾多量織まりありやや粘性あり
10層 10YR3/4暗褐色土ロームブロック 1 ~ 5 mm多量燒土粒子・ブロック 1 ~ 5 mm少量灰化ブロック 1 ~ 5 mm少量細砂砾多量織まりありやや粘性あり
11層 10YR3/4暗褐色土ロームブロック 1 ~ 3 mm中量燒土粒子・ブロック 1 ~ 10 mm少量灰化ブロック 1 ~ 2 mm少量細砂砾多量織まりありやや粘性あり
12層 10YR3/4暗褐色土ロームブロック 1 ~ 10 mm多量燒土粒子・ブロック 1 ~ 2 mm少量細砂砾多量織色土上ブロック 5 ~ 15 mm少量織まりありやや粘性あり
13層 10YR3/4暗褐色土ロームブロック 1 ~ 5 mm多量燒土粒子・ブロック 1 ~ 5 mm少量細砂砾多量織色土上ブロック 10 ~ 20 mm少量織まりありやや粘性あり
14層 10YR3/4暗褐色土ロームブロック 1 ~ 20 mm多量細砂砾多量織色土上ブロック 5 ~ 20 mm少量織まりありやや粘性あり

遺物 1は受け口状の内湾口線の土師器・房縫型甕。土師器杯はロクロ杯、非ロクロ杯、内黒杯が見られる。6の内面は光沢があるが、明瞭なミガキ単位は認められず、使用による摩滅を考慮したい。7の内黒杯は、体部外面のミガキは施されず、内面も疎らで方向は一定しない。外面には赤色顔料の痕跡が認められる。9の台付皿は貼り付け高台で、作りがシャープである。

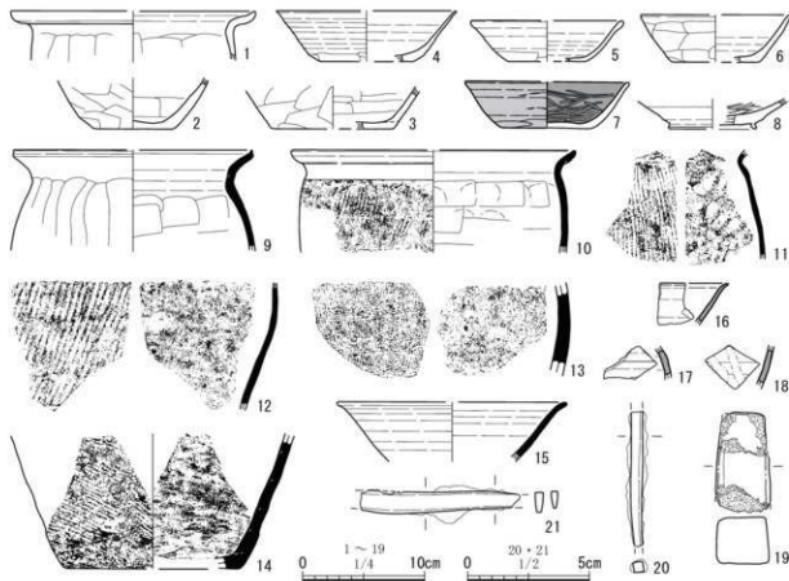
9は一見、土師器甕の形態を示すが、やや硬質の還元焼成を示し(断面は酸化色)、胴部は外面タテケズリで叩き痕は確認できないものの、内面には当て具の痕跡とも思われる丸みを帯びた凹凸が見られることから、昭和62年度調査のSI 4-9に類似する須恵器の甕と判断した。10・12は軟質・酸化焼成の須恵器甕である。胴部外面には平行叩き痕、内面には円形の当て具のくぼみ痕がある。15は表面黒色、断面褐色を呈する「くすべ焼き」の須恵器杯である。大型である。

16は東海産の灰釉陶器碗。器壁は薄く、丸みのない体部、口縁端部は緩やかに外反する。灰釉は内面に認められ、刷毛塗りであろうか。黒窓90号窓式でも新しい段階(2~3型式:860~900年)に比定される。

時期 本土器群の組成も昭和62年度調査SI 4(9世紀第3四半期)に認められる。煮炊具の甕は土師器・須恵器(千葉産)の両方があり、後者が目立つ。土師器非ロクロ杯6は遅くまで残った例と考えられ、土師器杯・灰釉陶器碗の型式からも9世紀後葉(国府編年5期)に比定される。

第10表 第2号堅穴建物跡出土土器観察表

記載番号	記注	種類	器種	現存	口径	深さ	底径	重量	胎土	成・整形の特徴	色調	備考
1.	No. 12 土師器 甕	口縁下部1/5~底 部	—	(20.0)	(4.0)	—	63.0	白・赤・黒・透・黄・ 青	外山側部下クズリ、口縁部受け 口状	10YR6/4明黄褐		
2.	No. 1. 14 土師器 甕	底部3/5	—	(4.2)	6.6	90.3	80.0	青鉄・白・赤・ 透・黄	外山側部左上クズリ。内面ヨコ ナザ、底面二方向クズリ	7.5034/3褐	被黒墨化	
3.	No. 17. 18 土師器 甕	底部1/4	—	(13.5)	(10.0)	74.3	80.0	青鉄・白・赤・透・ 黄	外山側部右上クズリ、内面ヨコナ ザ、底面クズリ	2.5056/6明赤褐	被黒赤化	
4.	No. 13. カマド 土師器 甕	口縁~底部 1/3	—	(14.6)	4.2	(7.6)	88.7	骨針・黒墨・白・赤・ 透・黄・砂	外山側部下端手持ち右クズリ。 底面手持ち多方向クズリ	7.5036/6褐		
5.	No. 7 土師器 杯	口縁1/3~底 部1/3	—	(12.0)	3.4	(6.0)	43.2	白・赤・黒・透・ 砂	外山側部下端右回転ケズリ。底 面ヨコナザマード。口縁端濃褐色	7.5037/6褐		
6.	2区 土師器 杯	口縁4/4~底 部1/4	—	(12.2)	3.9	(7.2)	42.3	白・赤・ 透・砂	底面多方向ケズリ。底面右 カギ	2.5056/6明赤褐	外山黒色 内山使用摩擦	
7.	No. 11. 21 土師器 杯	口縁1/4~底 部1/4	—	(13.2)	3.8	(7.0)	67.3	骨針・黒墨・白・赤・ 透・砂	外山側部下端右回転ケズリ。内 面ヨコナザマード。底面右側擦し赤切 り→周囲回転ケズリ。外山側部、 内山表面処理	7.5037/6褐		
8.	2区 土師器 皿	体~底部1/5	—	(2.5)	(7.0)	23.9	白・赤・黒・透・ 黄	外山側部下端右回転ケズリ。内 面ヨコナザマード	2.5056/6褐	有肩皿		
9.	No. 5. 21 須恵器 甕	口縁1/3~底 部	—	(19.0)	(8.2)	—	121.4	青鉄・白・赤・透・ 黄	外山側部下クズリ。内面側部 有段、口縁端横幅上げ伏	2.506/2灰オリーブ	やや被黒、底元 施成	
10.	No. 18. 24 須恵器 甕	口縁1/4~底 部	—	(23.1)	(8.4)	—	128.0	骨針・黒墨・白・赤・ 透・黄・砂	外山側部平行タタキ。内面当て 直角ヨコ(凹凸)ナザ	3.504/31灰・赤・ 透・青66/6褐	軟質・酸化焼成	
11.	3区 須恵器 甕	口~肩部	—	(8.8)	—	29.6	白墨(赤)・白・砂	外山側部平行タタキ。内面当て 直角ヨコ(凹凸)ナザ	2.55/2灰灰黄	新南灰墨 被黒・還元燒成		
12.	No. 20 須恵器 甕	胴下半部	—	(10.7)	—	71.5	骨針・白・透・砂	外山側部平行タタキ。内面当て 直角ヨコ(凹凸)ナザ	外・2.504/1黄灰 内・2.506/6褐 3/2灰 オリーブ 透・7.5W5/4にぶい 透	被黒・酸化焼成 (断面酸化色)		



第15図 第2号竪穴建物跡出土遺物

第11表 第2号竪穴建物跡出土土器観察表

陶器番号	注記	種類	器種	残存	口径	深高	底径	重量	新土	成・整形の特徴	色調	備考
13 No. 4, 1 IC	鉢器	碗	底半部	—	(7, 6)	—	—	229.8	白(多く透)・透 砂	NST/灰	硬質・淀元焼成	
14 No. 19	鉢器	碗	側下平～底部 1/4	—	(11, 1)	(14, 2)	166.1	白・黒・黒・透	外曲側面平行タタキ→下端ヨコケズリ。内面凸上ナダ。底面 砂目無調整	ST/T/1灰	硬質・淀元焼成 追加熱帯化	
15 No. 2	鉢器	杯	口縁1/5～底部	(18, 8)	(4, 9)	—	—	14.0	青針・白(多く透) 透・黄	外曲体部下端手持ちクリン 透: ST/T/1 黒	軟質・淀元焼成 透: ST/T/1 黑(透き くすり感)	
16 4区 (火)鍍鉢 器	鍍鉢	碗	口縁～底部	—	(3, 9)	—	2.3	白・黒・黒・透	外曲底部。内面火候頗る差 れ	ST/T/1灰白 透: ST/T/2 オリーブ 黄	東南産	
17 4区 (火)鍍鉢 器	鍍鉢	瓶	瓶部	—	(2, 7)	—	6.2	白・黒・黒	外曲火候。内面鑿胎	ST/T/1灰白 透: 10T/2 オリーブ 灰	東南産	
18 4区 (火)鍍鉢 器	鍍鉢	瓶	側下部	—	(3, 6)	—	8.6	白・黒・黒・透	外曲火候也。内面鑿胎	ST/T/2灰白 透: 10T/2 オリーブ 灰	東南産	

第12表 第2号竪穴建物跡出土土製品観察表

陶器番号	注記	種類	器種	残存	長さ	最大幅	最大厚	重量	新土	成・整形の特徴	色調	備考
19 No. 15, 4区	土製品	支撑	下部欠損	(8, 3)	4.5	3.8	163.9	白・透・黄	角柱形に成形 透: 2.5T/4/2 塵灰黄 新: 2.5T/5/8 明帯褐	被熱顕著。表面白化・淀元焼成 新: 粘土行者		

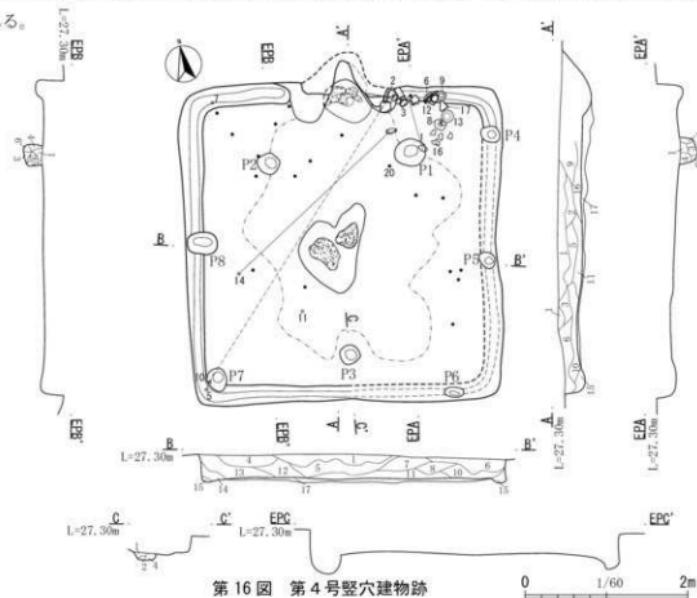
第13表 第2号竪穴建物跡出土鉄製品観察表

陶器番号	注記	種類	器種	残存	長さ	最大幅	最大厚	重量	成・整形の特徴		
20 No. 6	鉄製品	鎌	基部上面欠損	(4, 3)	0.4	0.4	6.0	—	—	—	—
21 3区	鉄製品	刀子	基部両端欠損	(6, 6)	0.8	0.3	5.7	—	—	—	—

第4号竪穴建物跡

遺構 位置:C4グリッド。平面形状:正方形。主軸方向:N 10° -E。規模:長軸3.90m、副軸3.80m、床面までの深さ最大で0.32m。覆土:ロームブロックを多く含む暗褐色土が人為堆積を呈し、15層に分層された。壁:垂直に立ち上がる。カマド:北壁面中央部に位置する。遺存状態は良好である。壁面を40cm掘り込んで構築しており、構築材には細砂粒を多く含む暗褐色粘土が堆積し、袖部においては外側から積み上げて構築している様相を呈す。壁面のラインに沿って火袋部が存在し、火床部もほぼ同位置であり、著しい焼土化が確認されている。火袋部の幅は約63cmを測る。煙道は壁面から30cm奥に位置し、火袋部床から緩やかに立ち上がる。周溝:カマド部分を除いた壁面直下に検出された。柱穴:8基検出されている。カマド前面左右に主柱穴が2基配され(P1・2)、東西と南壁直下に6基確認される(P3~8)。南壁中央直下のピット(P3)は出入り口施設に伴うものと思われる。床:カマド前面から床面中央部にかけて著しく硬化する。その中央部には被熱痕跡が確認されている。直径約20cmの円形状に床が挿鉢状に約3cm窪み、著しい焼土化が認められ、その外側にも被熱痕跡が広がる。これに伴う遺物は検出されなかった。掘方:カマド焚口部直下と竪穴四隅が顕著に掘り窪められている。中央部で約2cm、四隅下で約20cmを測る。

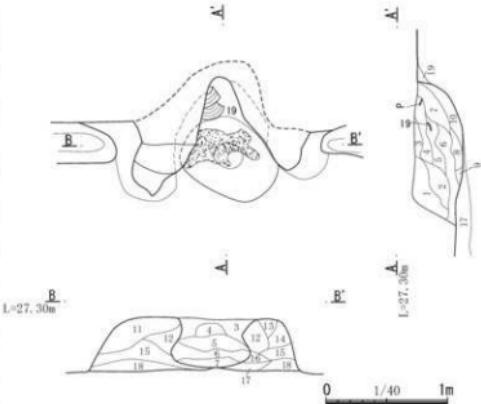
遺物出土状況: 中央から南東部にかけて、特にカマドの右側が多い。建物廃絶時に廃棄されたものか。南西隅の床面直上で土器器杯が甕胴部破片の上に上向きに重ねてあり、祭祀に伴うものか。所見:柱穴を壁面に配することで床面を広く使用するための構造と思われる。本建物跡は工房跡の可能性が指摘される。



第16図 第4号竪穴建物跡

- 1層 10YR3/4暗褐色土ロームブロック1~5mm中量他土粒子ブロック1~2mm微量
褐色土ブロック10~20mm少量ややカリや粘性あり
2層 10YR3/4暗褐色土ロームブロック1~3mm多量他土粒子ブロック1~3mm微量
褐色土ブロック10~30mm中量ややカリや粘性あり
3層 10YR3/4暗褐色土ロームブロック1~5mm中量他土粒子ブロック1~2mm微量
褐色土ブロック10~20mm中量細粒多量繊維ありやや粘性あり
4層 10YR3/4暗褐色土ロームブロック1~3mm多量他土粒子ブロック1~3mm微量
灰化ブロック1~3mm暗褐色土ブロック10~20mm多量ややカリや粘性あり
5層 10YR3/4暗褐色土ロームブロック1~5mm多量他土粒子ブロック1~3mm微量
褐色土ブロック10~20mm中量細粒多量繊維ありやや粘性あり

- 6層 10YR3/4暗褐色土・ロームブロック1～5mm多量土粒子ブロック1～2mm微量炭化コロッカ1～3mmややありやや粘性あり
- 7層 10YR3/4暗褐色土・ロームブロック1～2mm中量土粒子ブロック1～2mm微量暗褐色土ブロック5～10mm中量土粒子ブロック1～2mm微量
- 8層 10YR3/4暗褐色土・ロームブロック1～2mm中量土粒子ブロック1～3mm微量暗褐色土ブロック1～2mm中量土粒子ブロック1～2mm微量
- 9層 10YR3/4暗褐色土・ロームブロック1～3mm微量多量土粒子ブロック1～2mm少量炭化ブロック1～3mm微量砂粒多量ややありやや粘性あり
- 10層 10YR3/4暗褐色土・ロームブロック1～5mm多量土粒子ブロック1～2mm微量微量化ブロック1～2mm暗褐色土ブロック10～20mm中量碳まりありやや粘性あり
- 11層 10YR3/4暗褐色土・ロームブロック1～2mm多量土粒子ブロック1～3mm微量暗褐色土ブロック10～30mm中量碳まりありやや粘性あり
- 12層 10YR3/4暗褐色土・ロームブロック1～3mm微量多量土粒子ブロック1～3mm中量炭化コロッカ1～5mm暗褐色土ブロック20～30mm多量ややありやや粘性あり
- 13層 10YR3/4暗褐色土・ロームブロック1～5mm微量土粒子ブロック1～5mm少量暗褐色土ブロック10～20mm少量やややややや粘性あり
- 14層 10YR3/4暗褐色土・ロームブロック1～3mm多量暗褐色土ブロック10～20mm中量ややややや粘性あり
- 15層 10YR3/4暗褐色土・ロームブロック1～15mm多量多量暗褐色土ブロック10～20mm多量ややややや粘性あり
- 化コロッカ1～3mm微量暗褐色土ブロック10～20mm少量やややややややや粘性あり
- 3層 10YR3/4暗褐色土・ロームブロック1～2mm多量土粒子ブロック1～3mm微量炭化コロッカ1～3mm微量暗褐色土ブロック10～20mm多量ややややや粘性あり
- 5層 10YR3/4暗褐色土・ロームブロック1～2mm少量土粒子ブロック1～30mm微量暗褐色土ブロック5～10mm少量砂粒多量ややややや粘性あり
- 6層 10YR2/3黒褐色土・ロームブロック1～2mm多量土粒子ブロック1～10mm多量黑色土ブロック2～5mm微量砂粒多量ややややややや粘性あり
- 7層 10YR2/3黒褐色土・ロームブロック1～3mm多量土粒子ブロック1～5mm中量炭化ブロック1～2mm微量暗褐色土多量ややややや粘性あり
- 8層 10YR2/1黒褐色土・ロームブロック1～2mm中量土粒子ブロック1～10mm多量黑色土ブロック5～10mm微量砂粒多量ややややややや粘性あり
- 9層 10YR2/1黒褐色土・ロームブロック1～2mm中量土粒子ブロック1～10mm多量黑色土ブロック5～10mm微量砂粒多量ややややややや粘性あり
- 10層 10YR2/3黒褐色土・ロームブロック1～2mm少量土粒子ブロック1～10mm微量炭化ブロック1～3mm微量暗褐色土ブロック5～20mm中量砂粒多量碳まり強やや粘性あり
- 12層 10YR2/3黒褐色土・土粒子ブロック1～10mm微量炭化ブロック1～3mm微量暗褐色土ブロック5～10mm微量砂粒多量ややややや粘性あり
- 11層 10YR3/2暗褐色土・ロームブロック1～2mm微量土粒子ブロック1～10mm微量炭化ブロック5～10mm微量暗褐色土ブロック1～10mm微量砂粒多量ややややや粘性あり
- 13層 10YR3/2暗褐色土・土粒子ブロック5～5mm中量砂粒多量暗褐色土ブロック5～10mm微量砂粒多量碳まり強やや粘性あり
- 14層 10YR3/2暗褐色土・ロームブロック1～2mm微量炭化土粒子ブロック1～2mm微量暗褐色土ブロック5～5mm多量砂粒多量碳まり強やや粘性あり
- 15層 10YR3/2暗褐色土・ロームブロック1～3mm多量砂粒多量土粒子ブロック1～10mm微量暗褐色土ブロック5～5mm微量砂粒多量碳まり強やや粘性あり
- 16層 10YR3/2暗褐色土・ロームブロック1～2mm微量炭化土粒子ブロック1～2mm微量暗褐色土ブロック5～10mm微量砂粒多量碳まり強やや粘性あり
- 17層 10YR3/4暗褐色土・ロームブロック1～10mm多量多量土粒子ブロック1～10mm中量ややありやや粘性あり
- 18層 10YR3/4暗褐色土・ロームブロック1～20mm多量暗褐色土ブロック5～10mm多量砂粒多量碳まり強やや粘性あり
- 19層 10YR3/4暗褐色土・ロームブロック1～3mm多量多量土粒子ブロック1～10mm微量砂粒多量碳まり強やや粘性あり

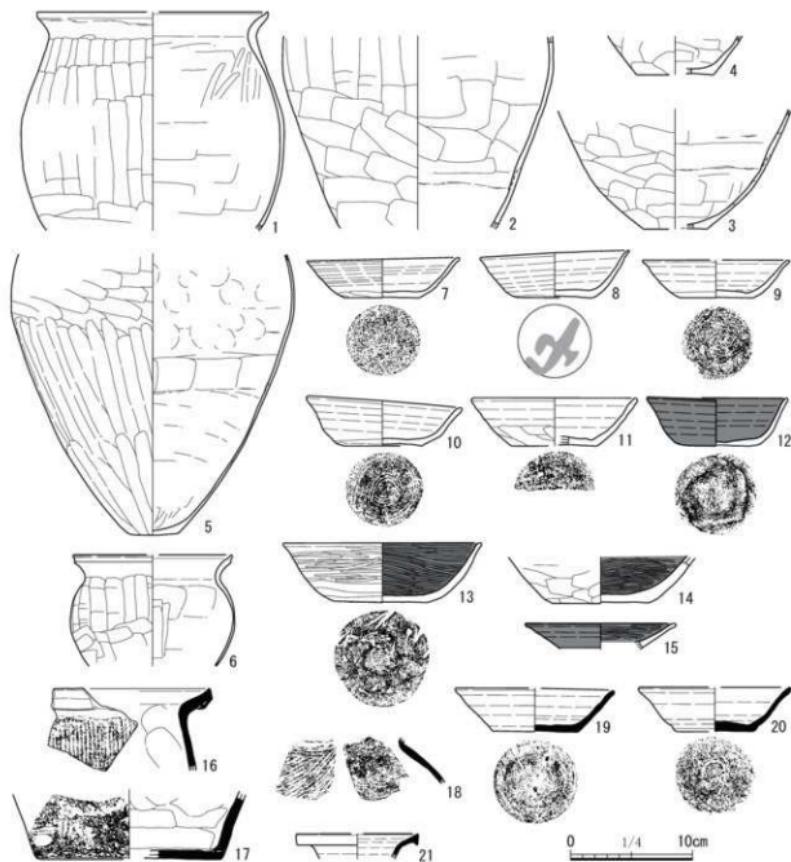


第17図 第4号竪穴建物跡 カマド

遺物 土器部・房縁型窓1・2は武藏型窓(5)より厚いものの胴部は極めて薄手のつくりで、胎土には赤色粒子(酸化鉄。高師小僧か)の含有が目立つ。外面は胴上半部を下方向のタテケズリのち、下半部を右方向(あるいは右下)のヨコケズリが特徴である。田中 裕(田中2002)の言う房総S'型に該当するものである。土器部7は薄手で、体部外面に細かな段状のロクロナデが特徴的なもの。8の底面にはモチーフ不明の朱書きがある。10は口縁端部が肥厚する杯で、胎土に黒雲母粒子を多量に含み、他と異なる。11の外面体部下端手持ちケズリの杯の胎土は窓1・2と類似する。12は肌理が細かい胎土で、内外面黒色処理(漆塗りではない)が施されたもの。13は内黒杯で、外面のミガキはやや疎

らになっているが、内面は密でていねいなミガキである。14も内黒・ミガキ処理されるが、厚手・大振りで鉢あるいは大型の杯とみられる。15は黒色処理・内面ミガキの皿で、高台の有無は不明。16は酸化・軟質焼成の千葉産須恵器である。17は平底の須恵器甕で、被熱痕跡が著しい。18は薄手・硬質の須恵器甕で、胎土や成・整形の特徴から湖西窯産の可能性がある。21はシャープな作りで尾張窯産の長頸壺と思われる。19の須恵器杯の底部外面には火拂痕がある。20は千葉産の軟質須恵器である。

時期 21の長頸壺は口縁端面が外傾し、形状から黒塙14号窓式（9世紀前葉）に比定されるか。武藏型甕は肩部に丸みがあり、土師器・須恵器杯、土師器内黒杯、須恵器平底甕の型式から9世紀前半（国府編年4期）に位置づけられる。



第18図 第4号竪穴建物跡 出土遺物

第14表 第4号堅穴建物跡出土土器観察表

高歛 番号	注記	種類	器種	残存	口径	器高	底径	重量	新土	成・形の特徴	色調	備考
1 No. 5・21. カマド, 1 区	土師器 便		口 線 1.3 ~ 底 部中位	(18.0)	17.9	—	277.3	白・赤・透・砂 黄	外曲面上部下部テグツリ→ 半底部ケズリ。内面ヨコナ ギ。口縁部模様上上げ状	7.5086/8根	二次焼成。外 面カマド粘土 付着か。	
2 No. 1・2. カマド, 1 区	土師器 便	側面中位~下 部1/2	—	(15.9)	—	263.0	白・赤・黒・透 黄	外曲面上半部下部テグツリ→ 半底部ケズリ。内面ヨコナ ギ。口縁部模様上上げ状	7.5086/9根	二次焼成。セ ザイク状。外 面カマド粘土 付着か。		
3 No. 6・7・ 48. カマ ド, 1区	土師器 便	側面下半~底盤 1/4	—	(9.8)	5.2	197.7	角×(多)・白・赤 黒・透・砂・黄	外曲面下半部右ケズリ。内 面ヨコナギ。底面ケズリ	2.5095/6明赤地 化	二次焼成。赤 化		
4 1~2 (5. カマド, 1 区)	土師器 便	側面下半~底盤 7/8	—	(3.2)	6.2	73.9	角×(多)・白・赤 透・砂・黄	外曲面下部右ケズリ。底 面ケズリ	3.004/4にぶい赤 地	二次焼成。赤 化		
5 No. 4・30. 31	土師器 便	側面中位~底盤 完全	—	(23.0)	4.0	226.1	角×(多)・白・透 黒・白・赤・透 黄	外曲面上半部左ケズリ→ 底面下部ケズリ。底部ケズ リ	2.5086/6根 2.5085/6明 地化	武藏型 二次焼成。カ マド粘土付着 地		
6 No. 9. 1区	土師器 便	口 線 3.5 ~ 底 部中位	(13.0)	(9.1)	—	125.4	角×(多)・白・赤 透・砂・黄	外曲面上半部下部ケズリ→ 半底部下ケズリ。口縁部模 様上上げ状	3.004/6赤地	小型便		
7 No. 43	土師器 杯	口 線 5.6 ~ 底 部完全	12.5	3.3	6.0	109.5	白・赤・透・砂 黄	外曲面段階ケメ状。手下端 手持右ケズリ。底面手持 左ケズリ	3.007/4にぶい 黄地	深褐色		
8 No. 15	土師器 杯	口 線 3.4 ~ 底 部完全	12.2	3.9	6.0	137.7	角×(多)・白・透 砂・黄	外曲面段階ケメ。底面・周縁 左側ケズリ	3.005/4にぶい 黄地	道面「十」字 形朱墨書き 被熱黒化		
9 No. 12	土師器 杯	口 線 3.7 ~ 底 部完全	(12.0)	3.1	6.0	108.6	角×(多)・白・透 砂・黄	外曲面底下端・底面左回転 ケズリ	7.5087/6根	一部深灰色		
10 No. 31. 3 区	土師器 杯	口縁完形	12.6	4.1	6.2	144.4	黒透・白・赤 黒・透・砂	外曲面底下端・底面左回転 ケズリ	7.5087/6根			
11 No. 32. 3 区	土師器 杯	口 線 1.3 ~ 底 部2/5	(13.4)	3.9	7.0	80.6	黒透・白・赤・透 砂・透	外曲面下端手持右ケズリ 底面手持ら方向ケズリ	2.5055/4にぶい 根	被熱黒化		
12 No. 10・11. 1区	土師器 杯	口 線 3.5 ~ 底 部完全	11.4	4.0	8.7	109.7	角理織心・骨片 角・白・透・黄	底面回転系切口→外周アラ ーニ・周縁手持ちケズリ。内 面色処理か	2.5087/2灰地			
13 No. 13	土師器 碗	完形	—	16.2	4.9	7.8	282.7	角理織心・骨片 白・赤・透	外曲面下部左回転ケズリ →体縁模様ヨコミガキ。底面回転 切り→周縁左回転ケズリ→ 底ら・ガタ。内面黒色処理	2.5087/2根 無台輪		
14 No. 22・34. カマド	土師器 碗	体下半~底盤 注記完全	—	(3.9)	8.0	194.8	角・白・透・黄	外曲面底部右ケズリ。 ラヨンヨミガキ。底面マガタ か。内面黒色処理	2.5086/4にぶい 根	大型碗		
15 4.18.	土師器 皿	口 線 1.3 ~ 底 部	(12.4)	(2.2)	—	17.6	青透・黒透・白・透 透・黄	外曲面底下端回転ケズリ 内面ヨコミガキ。内外底面 色処理	3.005/4にぶい 黄地	右台輪 被熱黒化		
16 No. 20	乳鉢器 便	口縁~底部	—	(6.7)	—	43.9	黑透・角×(多) 白・赤・透・砂 黄	外曲面底平行タタキ。内面 脚部當て具取→ナダ	3.004/4にぶい 根	酸質・酸化焼 成		
17 No. 16	乳鉢器 便	体下半~底盤 1/3	—	(5.0)	(15.0)	160.0	青透・白・黒・透 黄	外曲面底平行タタキ→右ケ ズリ。内面当て具取→ヨコ ナダ。底面ヨコ無開窓	2.507/2灰黄 地	被熱黒化 成		
18 カマド	乳鉢器 便	研磨	—	(3.7)	—	18.4	白・透	外曲面底平行タタキ→ヨコ ナダ。内面同心円当て具取 →ナダ	成白	東海座 研磨・深元燒 成		
19 No. 49	乳鉢器 杯	口 線 2.3 ~ 底 部完全	13.0	3.6	7.0	112.5	白・赤・透・砂 黄	底面回転ヘタ切り→回転ケ ズリ	3.006/4にぶい 黄地	酸質・酸化焼 成		
20 No. 23.	乳鉢器 杯	口 線 1.3 ~ 底 部完全	(12.4)	3.6	6.4	106.3	白(多)・赤(多) 黒(多)・透・黄	底面下端回転ケズリ。底 部回転ヘタ切り→手持ち多 孔方向ケズリ	2.5087/1灰 地	被熱黒化 成		
21 1区.	乳鉢器 碗	口縁部 1/10	(10.0)	(2.1)	—	6.7	白・黒	口縁部底面粗。シャープな つくり	2.507/1灰白 地	東海座 内面口縁部自 然輪		

第5号竪穴建物跡

遺構 位置: C4グリッド。南東部が調査区外となる。平面形状: 方形が想定される。主軸方向: N=3°E。規模: 主軸方向2.05m以上、副軸方向1.84m以上、床面までの深さ最大で0.54m。覆土: ロームブロックが多く含む暗褐色土が人為堆積を呈し、18層に分層された。壁: ほぼ垂直に立ち上がる。カマド: 北壁に位置する。遺存状態は比較的良好である。構築材には細砂粒が多く含む暗褐色粘土が堆積する。壁面を約90cm掘り込んで構築している。火袋部は北壁ラインよりやや南に位置し、火床部は火袋部とはほぼ同位置である。火袋部奥に支脚が確認された。煙道部は壁面より約50cm北に位置し、底面は火袋部から緩やかに立ち上がる。周溝: カマド部分を除いた壁面直下に確認された。柱穴: 北西隅の内側、調査区壁面下で検出されている。床: カマド左前面に硬化面が確認された。掘方: 北西隅部直下に掘り込みが確認された。床面からの深さは最大で約21cmを測る。遺物出土状況: カマド煙道部分で検出された。

S105

1層 10Y2/3 黒褐色土ロームブロック 1~2mm 多量焼成土層
多量黒褐色土ブロック 10~30mm 多量やや粘性あり

2層 10R2/3 黑褐色土ロームブロック 1~3mm 多量焼成土層
多量焼成土ブロック 1~3mm 多量黒褐色土ブロック 10~40mm 多量やや
ありやや粘性あり

3層 10R2/3 黑褐色土ロームブロック 1~5mm 多量焼成土層
多量焼成土ブロック 1~3mm 多量黒褐色土ブロック 15~15mm 多量やや
ありやや粘性あり

4層 10R2/3 黑褐色土ロームブロック 1~2mm 多量焼成土層
多量黒褐色土ブロック 10~30mm 多量やや粘性あり

5層 10R2/3 黑褐色土ロームブロック 1~3mm 多量焼成土層
多量黒褐色土ブロック 10~30mm 多量やや粘性あり

6層 10R2/3 黑褐色土ロームブロック 1~15mm 多量焼成土層
多量黒褐色土ブロック 10~20mm 多量やや粘性あり

7層 10R2/3 黑褐色土ロームブロック 1~5mm 多量焼成土層
多量焼成土ブロック 1~3mm 多量黒褐色土ブロック 5~15mm 多量
焼成土層ややや粘性あり

8層 10R2/3 黑褐色土ロームブロック 1~15mm 多量焼成土層
多量焼成土ブロック 1~2mm 多量黒褐色土層
多量焼成土層ややや粘性あり

9層 10R2/3 黑褐色土ロームブロック 1~2mm 多量焼成土層
多量焼成土層ややや粘性あり

10層 10R2/3 黑褐色土ロームブロック 1~5mm 多量焼成土層
多量焼成土ブロック 1~3mm 多量黒褐色土ブロック 10~20mm 多量
焼成土層ややや粘性あり

11層 10R2/3 黑褐色土ロームブロック 1~10mm 多量
黒褐色土ブロック 1~10mm 多量焼成土層
多量焼成土層ややや粘性あり

12層 10R2/3 黑褐色土ロームブロック 1~3mm 多量焼成土層
多量黒褐色土ブロック 3~5mm 多量ややや粘性あり

13層 10R2/4 黑褐色土ロームブロック 1~5mm 多量
黒褐色土ブロック 5~10mm 多量焼成土層
多量焼成土層ややや粘性あり

14層 10R2/4 黑褐色土ロームブロック 1~2mm 多量焼成土層
多量黒褐色土ブロック 1~5mm 中量
焼成土層ややや粘性あり

15層 10R2/4 黑褐色土ロームブロック 1~3mm 少量
焼成土層ややや粘性あり

16層 10R2/4 黑褐色土ロームブロック 1~2mm 多量
焼成土層ややや粘性あり

17層 10R2/4 黑褐色土ロームブロック 1~5mm 中量
焼成土層ややや粘性あり

18層 10R2/4 黑褐色土ロームブロック 1~3mm 多量
焼成土層ややや粘性あり

19層 10R2/4 黑褐色土ロームブロック 1~2mm 多量
焼成土層ややや粘性あり

20層 10R2/3 黑褐色土ロームブロック 1~3mm 多量
焼成土層ややや粘性あり

21層 10R2/3 黑褐色土ロームブロック 1~20mm 多量
焼成土層ややや粘性あり

22層 10R2/2 黑褐色土ロームブロック 1~10mm 多量
焼成土層ややや粘性あり

23層 10R2/3 黑褐色土ロームブロック 1~10mm 多量
焼成土層ややや粘性あり

24層 10R2/3 黑褐色土ロームブロック 1~10mm 多量
焼成土層ややや粘性あり

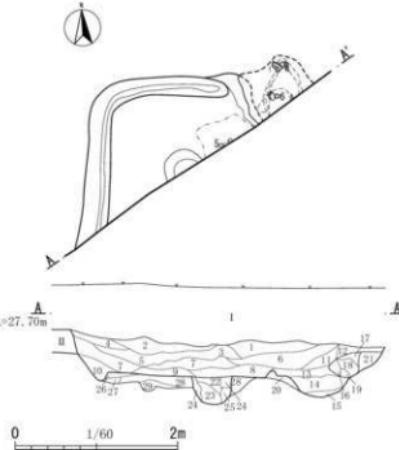
25層 10R2/3 黑褐色土ロームブロック 1~20mm 多量
焼成土層ややや粘性あり

26層 10R2/4 黑褐色土ロームブロック 1~15mm 多量
焼成土層ややや粘性あり

27層 10R2/3 黑褐色土ロームブロック 1~10mm 多量
焼成土層ややや粘性あり

28層 10R2/3 黑褐色土ロームブロック 1~30mm 多量
焼成土層ややや粘性あり

29層 10R2/3 黑褐色土ロームブロック 1~30mm 多量
焼成土層ややや粘性あり



第19図 第5号竪穴建物跡

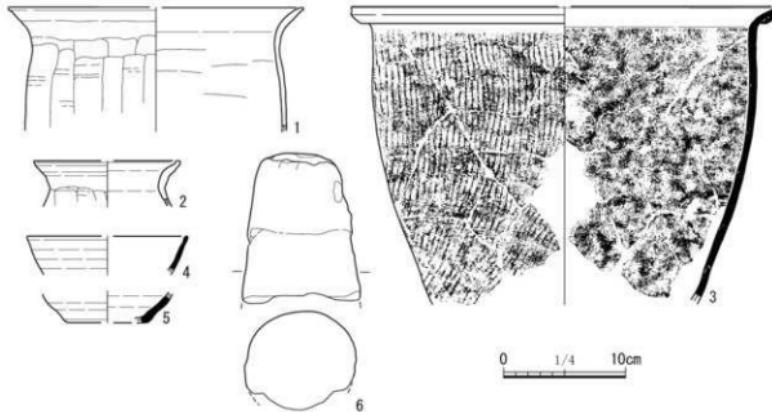
S105 カマド

- 1層 10YR2/3 黒褐色土ローム粘子・ブロック1～3mm中量燒土粘子ブロック1～3mm
2層 10YR3/4 噴褐色土ローム粘子・ブロック1～2mm中量燒土粘子ブロック1～3mm
3層 10YR3/4 噴褐色土ローム粘子・ブロック1～2mm中量燒土粘子ブロック1～3mm
4層 10YR3/4 噴褐色土ローム粘子・ブロック1～2mm中量燒土粘子ブロック1～3mm
5層 10YR3/4 噴褐色土ローム粘子・ブロック1～2mm中量燒土粘子ブロック1～3mm
6層 10YR3/4 噴褐色土ローム粘子・ブロック1～2mm中量燒土粘子ブロック1～3mm
7層 10YR3/4 噴褐色土ローム粘子・ブロック1～2mm中量燒土粘子ブロック1～3mm
8層 10YR3/4 噴褐色土ローム粘子・ブロック1～2mm中量燒土粘子ブロック1～3mm
9層 10YR3/4 噴褐色土ローム粘子・ブロック1～2mm中量燒土粘子ブロック1～3mm
10層 10YR3/4 噴褐色土ローム粘子・ブロック1～2mm中量燒土粘子ブロック1～3mm
11層 10YR3/4 噴褐色土ローム粘子・ブロック1～2mm中量燒土粘子ブロック1～3mm
12層 10YR3/4 噴褐色土ローム粘子・ブロック1～2mm中量燒土粘子ブロック1～3mm
13層 10YR3/4 噴褐色土ローム粘子・ブロック1～2mm中量燒土粘子ブロック1～3mm
14層 10YR3/4 噴褐色土ローム粘子・ブロック1～2mm中量燒土粘子ブロック1～3mm
-

第20図 第5号竪穴建物跡 カマド

遺物 1は薄手のつくりの外反口縁の甕であるが、胎土には海綿骨針が含まれ、器形も外面のケズリ手法も武藏型とは異なる。3～5は軟質焼成の千葉産須恵器。5は頭がすぼまらない器形を示すので甕と判断した。口縁端部をシャープに作り出す。4・5の須恵器杯は薄手の作りと法量から一見、似ているが、胎土が異なるようであり、同一個体ではない。

時期 須恵器甕の型式から9世紀前半(国府編年4期)に位置づけられる。



第21図 第5号竪穴建物跡 出土遺物

第15表 第5号竪穴建物跡出土土器観察表

番号	日記	種類	器種	残存	口径	底高	底径	重畠	胎土	成・整形の特徴	色調	備考
1	No.1. カマド 土鍋器	便	口縁 1/4 ~ 壁	(24.0)	(10.2)	—	121.7	骨針・白・透・砂・ 外曲脚部下ケズリ	7. SB6.6 橋	カマド粘土付着か		
2	一括	土鍋器	便	口縁 1/4 ~ 壁	(22.0)	(3.8)	—	53.9	白(多)・赤・透・ 黄	7. SB6.3 橋	一括焼成、黒化	
3	No.6.7.8. カマド、一 括	須恵器	瓶	口縁 1/4 ~ 壁 下平部	(35.0)	(24.4)	—	229.0	黒斑・白・バ(多) 白・赤・透・砂・ 黄	2. SB6.6 明春燒	軟質・陶化施成 被燒化	
4	一括	須恵器	杯	口縁部	(13.0)	(3.2)	—	4.2	骨針・白・透・黄	津井のつくり 表:黑	硬質・透光施成 (くすり焼き)	
5	一括	須恵器	杯	体下平~底部 1/6	(2.5)	(6.6)	12.5	角・白(多)・赤・ 黄	外曲脚部下端左回 転ケズリ。直面手持 跡: 7. SB6.4 に記載 か	表:黑	軟質・透光施成 (くすり焼き)	

第16表 第5号竪穴建物跡出土石器観察表

番号	日記	種類	器種	残存	長さ	最大幅	最大厚	重畠	材質	成・整形の特徴
6	No.4. カマド飯方 石製品	石製品	支脚	11枚完形	(13.6)	9.6	—	953.7	軟質砂岩 鐵頭円錐形 被熱赤在済	

(2) 挖立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡

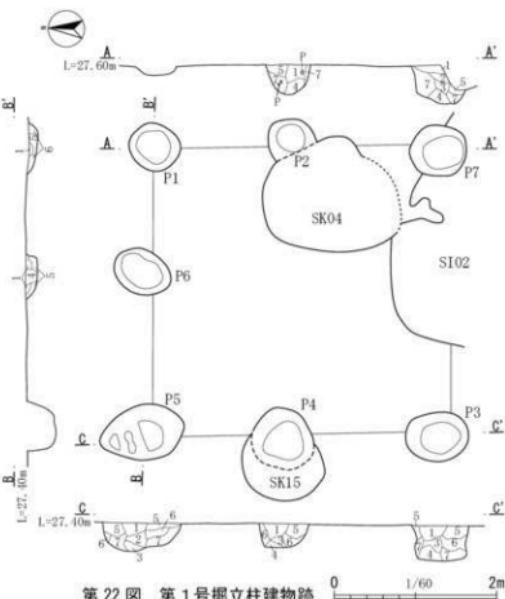
遺構 位置: C3グリッド。

規模: 梁行2間、桁行2間の側柱

建物跡。柱間はほぼ1.8m(6尺)を測り、梁行3.6m(12尺)、桁行3.6mの正方形。主軸方向: N=1°W。

重複関係: P2が第4号土坑に、P7が第2号竪穴建物跡に削平を受ける。P4が第15号土坑を切る。柱穴: 直径57cm~69cmの平面ほぼ円形を呈し、P2(U字状)以外は鍋底状断面を呈す。深さは13cm~46cmと不均等である。それぞれに柱痕跡が確認され、底部には当たり痕が明瞭に残る。

所見: P7は第2号竪穴建物跡のカマド袖部に削平を受けており、柱穴覆土や主軸方向が第4・5号竪穴建物跡と類似する。また、P7掘方覆土中層から土師器甕の口縁部が出土している。



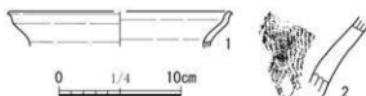
第22図 第1号掘立柱建物跡

第17表 第1号掘立柱建物跡
ピット計測表

ピット	平面 形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	断面 形状	重畠
P01	円形	64	42	13	鍋底状	
P02	円形	(43)	37	32	U字状	
P03	円形	80	69	43	鍋底状	
P04	円形	(77)	67	40	鍋底状	SK3.5を 切る
P05	橢円形	992	59	34	鍋底状	
P06	円形	64	32	15	鍋底状	
P07	円形	73	69	36	鍋底状	

遺物 1は土師器の甕口縁部で、薄手の作りと受け口形状から古墳時代前期のものとも思われる。2は外面に繩文が施される土器破片であるが、種別・器種不明である。

時期 上記の遺物の他は細片ばかりであるが、それらの特徴、軟質焼成の須恵器に比べて土師器の組成率が高いことが言える。何より、9世紀後葉の第2号竪穴建物跡に切られる事から、第4・5号竪穴建物跡とほぼ同時期の9世紀前半と判断する。



第23図 第1号掘立柱建物跡 出土遺物

第18表 第1号掘立柱建物跡出土土器観察表

地番 番号	注記	種類	器種	残存	口径	部底	底径	重量	胎土	成形の特徴	色調	備考
1	SD01-P7	土器部	甕	口縁部	17.8	2.9	—	16.2	青銅・角・墨・透・黄	口縁部受け口付	SD05417-51-赤褐色	
2	SD01-P7	土器部	不明	側面か	—	6.4	—	20.6	白・透・黄	外面繩文	SD05407-51-赤褐色	

第4節 近世以降

(1) 溝跡

3条確認されている。今回調査した第1号溝跡は昭和62年度調査のSD1の北西側部分にあたる。第2号溝跡においては、当初かなり新しい溝であると判断した。搅乱とすることも考慮したが断面観察の結果、中央部のみ耕作による搅乱に削平された溝として掲載することとした。

第1号溝跡

位置:C1・C2グリッド。北西部と南東部、南西半部は調査区外。規模:長さ2.57m以上、上端幅1.19m以上、下端幅0.43m以上、深さ最大で0.53m。走行方向:N-150°-E。南東方向に幾分傾斜する。平面形状:ほぼ直線。断面形状:北東部のみ検出するが、ほぼU字状と判断。重複関係:南東肩部が第5号ピットを一部削平。覆土:ロームブロックを多く含む暗褐色土が上層を占め、中層以下は黒褐色土が自然堆積する。底面:走行方向にほぼ平坦。

所見:底面には硬化面は認められず、覆土中や底部に水性堆積も認められない。3方向が調査区外に位置し、検出された長さも2.57mと比較的短いことから、性格を判断する上で判然としない部分も多いが、覆土や断面形から判断して地境溝の可能性を考える。

第2号溝跡

遺構 位置:C2・D2グリッド。第1号溝跡の北東部に並走する。北西部と南東部は調査区外。規模:長さ12.39m以上、上端幅最大で1.68m、下端幅最大で0.35m、深さ最大で0.88m。走行方向:N-54°-E。南東方向に幾分傾斜する。平面形状:ほぼ直線。上端幅は中央部でやや膨らみ、南東端部で1.13mとすばまる形で狭くなる。断面形状:断面中央部が搅乱に削平されており、北西壁面と底部の一部が埋滅するが、残存部分からU字状と判断する。覆土:ロームブロックを多く含む暗褐色土が自然堆積する。底面:走行方向にほぼ平坦。

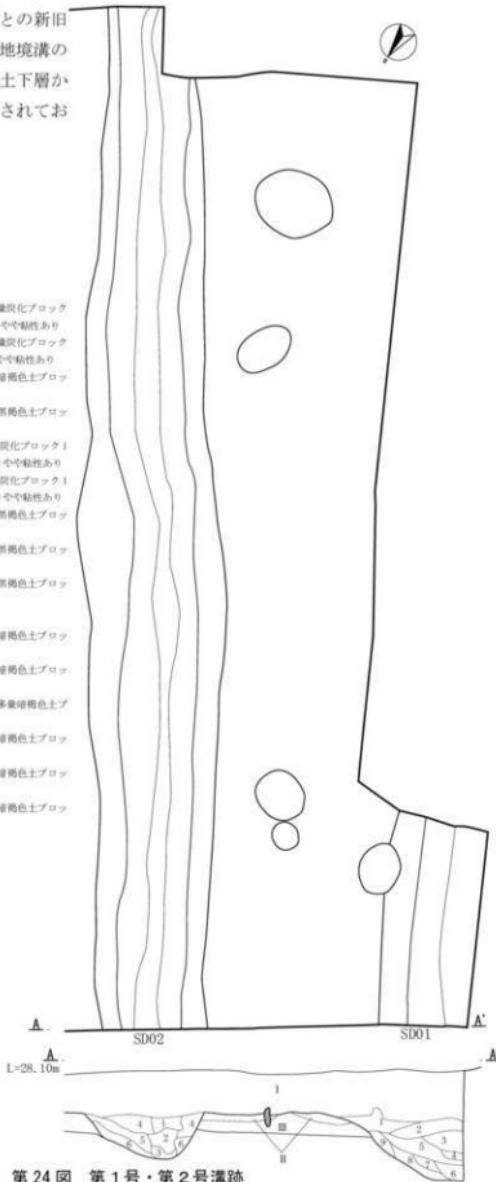
所見:底面及び覆土中の硬化面については搅乱による削平のため判然としない。覆土中や底部に水性

堆積も認められない。第1号溝跡との新旧関係は不明であるが、どちらかが地境溝の造り替えの可能性を示唆する。覆土下層から瀬戸・美濃窯産の擂鉢片が検出されており、当該期の遺構と判断した。

SD01

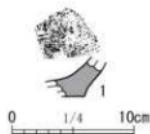
- 1層 10YR3/4暗褐色土ローム粒子・ブロック1～10mm多量炭化ブロック1～5mm細微量暗褐色土ブロック10～20mm多量ややありやや粘性あり
 - 2層 10YR3/4暗褐色土ローム粒子・ブロック1～10mm多量炭化ブロック1～3mm細微量暗褐色土ブロック5～15mm多量ややありやや粘性あり
 - 3層 10YR3/4暗褐色土ローム粒子・ブロック1～3mm多量暗褐色土ブロック5～15mm中量ややありやや粘性あり
 - 4層 10YR2/3黒褐色土ローム粒子・ブロック1～3mm多量暗褐色土ブロック10～20mm多量ややありやや粘性あり
 - 5層 10YR2/3黒褐色土ローム粒子・ブロック1～5mm多量炭化ブロック1～3mm細微量暗褐色土ブロック10～20mm多量ややありやや粘性あり
 - 6層 10YR2/3黒褐色土ローム粒子・ブロック1～2mm多量炭化ブロック1～2mm細微量暗褐色土ブロック10～20mm多量ややありやや粘性あり
 - 7層 10YR2/3黒褐色土ローム粒子・ブロック1～3mm多量暗褐色土ブロック10～20mm多量ややありやや粘性あり
 - 8層 10YR2/3黒褐色土ローム粒子・ブロック1～3mm多量暗褐色土ブロック10～20mm多量ややありやや粘性あり
 - 9層 10YR2/3 黒褐色土ローム粒子・ブロック1～10mm多量暗褐色土ブロック10～20mm多量ややありやや粘性あり
- SD02
- 1層 10YR3/4暗褐色土ローム粒子・ブロック1～2mm多量暗褐色土ブロック10～20mm中量ややありやや粘性あり
 - 2層 10YR3/4暗褐色土ローム粒子・ブロック1～10mm多量暗褐色土ブロック10～20mm多量ややありやや粘性あり
 - 3層 10YR3/4暗褐色土ローム粒子・ブロック1～10mm多量暗褐色土ブロック10～30mm中量ややありやや粘性あり
 - 4層 10YR3/4暗褐色土ローム粒子・ブロック1～10mm多量暗褐色土ブロック10～20mm中量ややありやや粘性あり
 - 5層 10YR3/4暗褐色土ローム粒子・ブロック1～5mm多量暗褐色土ブロック5～20mm少量ややありやや粘性あり
 - 6層 10YR3/4暗褐色土ローム粒子・ブロック1～20mm多量暗褐色土ブロック5～10mm中量ややありやや粘性あり

0 1/60 2m



第24図 第1号・第2号溝跡

遺物 1は瀬戸・美濃窯産の擂鉢である。底面は摩滅しており外側部下端は回転ケズリであるので近世の所産と判断される。器壁が比較的薄手のようであるので、19世紀代のものとも思われるが定かではない。



第25図 第2号溝跡出土遺物

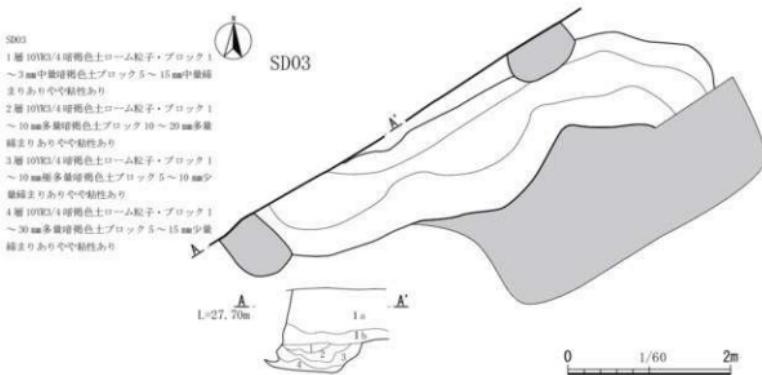
第19表 第2号溝跡出土土器観察表

地質 番号	日記	種類	器種	残存	口径	深さ	直径	重量	胎土	成・整形の特徴	色調	備考
1	一括 陶器	擂鉢	底部	—	3.2	—	12.6	白・黒・赤 木、内外面鉄錆、底面剥離	体部下端回転ケズリ。振り目13 個: 2.088.3 沢黄 個: 7.073.3 塗堀	澤黄	瀬戸美濃窯產	

第3号溝跡

位置:A3+A4グリッド。北西部が調査区外。南東部は擾乱で削平され、以南は確認されていない。規模:長さ5.70m、上端幅最大で1.36m、下端幅最大で0.58m、深さ最大で0.60m。走行方向:N=60°-E。北東方向に幾分傾斜する。平面形状:ほぼ直線的であるが不定形。南西端部で北西に屈曲し、北東端部で南東に屈曲する。断面形状:U字状。重複関係:南西端部と南東部は擾乱で削平。覆土:ロームブロックを多く含む暗褐色土が自然堆積。底面:やや起伏に富む。

所見:走行方向に逆S字状に屈曲しており、擾乱で削平されて全容がつかめない。性格は不明である。



第26図 第3号溝跡

(2) 遺構外出土遺物

写真図版と観察表に示したものは、いずれも表面採集された泥面子である。

第20表 近世遺構外出土遺物観察表

地質 番号	日記	種類	器種	残存	直径	最大厚	重量	胎土	成・整形の特徴	色調	備考
1	此採	土製品	泥面子	完形	2.4	0.9	7.1	白・赤・透	塑押し	SVR7.6	房山
2	此採	土製品	泥面子	完形	2.4	0.9	6.7	白・赤・透	塑押し	SVR7.6	蘭 相

第5節 時期不明遺構

土坑17基とピット142基が検出されている。土坑は調査区南西部から北西にかけて分布がみられ、ピットは主に調査区東部に著しく検出されている。両遺構ともそれぞれ3タイプに分類することができる。しかし帰属時期については、各出土遺物が微量であり判断しがたい。以下、詳細を述べる。

(1) 土 坑

遺構 土坑として取り上げた17基の内、3基(SK10・SK13・SK14)はピットの可能性がある。規模・形態・覆土から大別すると、平面楕円形を呈すもの、平面円形を呈し断面鍋底状のもの、平面円形を呈し断面U字状のものが検出されている。以下、概観を記し、個別の詳細は別表に示す。

平面楕円形を呈する土坑(SK01・SK02・SK07・SK08・SK09・SK11)

平面規模は長軸で73cm～116cm測り、いずれも鍋底状断面である。覆土はロームブロックを含む暗褐色土が主体土であり自然堆積を呈する。性格は不明である。第7～9・11号土坑は一部調査区外及び竪穴建物跡に削平を受けるが、規模・形態からこのグループに分類した。

平面円形を呈し断面鍋底状の土坑(SK03・SK04・SK05・SK16)

平面規模は直径44cm以上～116cmを測る。覆土はロームブロックを含む暗褐色土が主体で自然堆積を呈す。第3号土坑の覆土中から灰釉陶器片(碗・皿)が確認された。9世紀後葉の所産か。

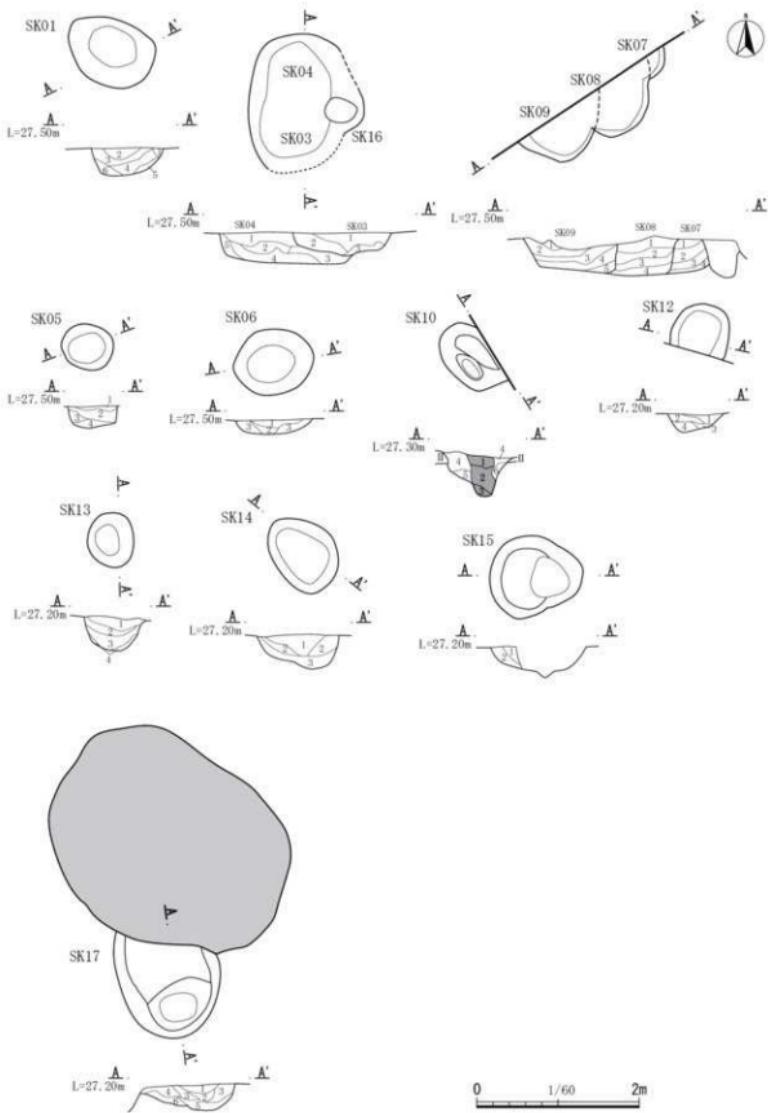
平面円形を呈し断面U字状の土坑(SK06・SK12・SK15・SK17)

平面規模は直径55cm以上から118cmを測る。覆土はロームブロックを多く含む暗褐色土が主体で、人為堆積を呈す。断面形はU字状から皿状であり、底面はいずれも不整形である。

第21表 土坑計測表

土坑番号	検出グリッド	平面形状	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	断面形状	堆積状況	堆積関係	備考
SK01	B3	楕円形	116	83	32	鍋底状	自然堆積	SK01を切る	
SK02	C3	楕円形	(127)	(86)	44	鍋底状	自然堆積		SK02・重複
SK03	C3	円形	(106)	(90)	22	鍋底状	人為堆積	SK02・SK04を切る	SK02・SK04・SK16と重複
SK04	C3	円形	(107)	(70)	38	鍋底状	人為堆積		SK16と重複
SK05	C2	円形	64	57	26	鍋底状	人為堆積		
SK06	B2	円形	100	(74)	18	王字状	人為堆積		
SK07	A4	楕円形カタ	(47)	(30)	40	鍋底状	自然堆積		調査区外
SK08	A4	楕円形カタ	(97)	(67)	18	鍋底状	自然堆積	SK07を切る	調査区外
SK09	A4	楕円形カタ	(66)	(58)	44	鍋底状	自然堆積	SK08を切る	調査区外
SK10	A5	楕円形	(100)	(59)	58	人為堆積			ピットカタ
SK11	C3	楕円形カタ	75	(44)	19	皿状	自然堆積		SK02と重複
SK12	B3	円形	(72)	(60)	25	王字状	人為堆積		SK02と重複
SK13	B3	円形	60	52	43	—	人為堆積		ピットカタ?硬化泥あり
SK14	B3	不正円形	100	78	44	—	人為堆積		ピットカタ?
SK15	C3	円形カタ?	(118)	(53)	38	王字状	人為堆積	SK01-P04と重複	
SK16	C3	円形カタ?	(56)	(46)	43	鍋底状	人為堆積	SK3/SK4を切る	
SK17	B4	円形カタ?	(118)	(92)	47	王字状	人為堆積		堆積に切られる

遺物 1・2は東海産の灰釉陶器である。1の皿は灰釉刷毛塗りで、外面には刷毛の擦過痕跡を残す。口縁端部は強く外反し、釉層もやや厚いことから、黒窯90号窯式でも古い段階(1～2型式)に位置づけられる。一方、2の碗は体部にやや丸みを残して口縁端部も外反するものの、釉層は極めて薄く、内面は露胎ではないかと思われる。両者が共伴するものであれば、同窯式2型式、860～880年・9世紀後葉に位置づけられるか。



第27図 土坑

- 501

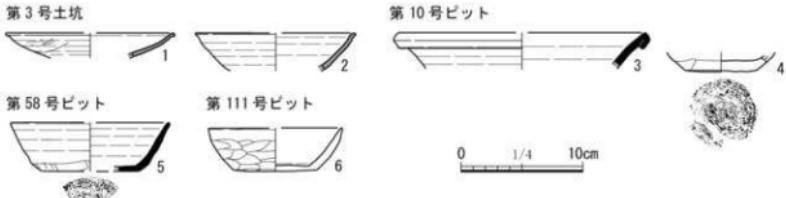
(2) ピット

136基のピットが確認された。概ね、1) 断面鍋底状を呈して底面には明瞭な当たり痕跡を有し、覆土が黒褐色土ないし暗褐色土のもの。2) 断面形が漏斗状ないしU字状であり、覆土が黒褐色土または暗褐色土のもの。3) 断面形が漏斗状ないしU字状であり、覆土は2よりやや明るい暗褐色土が堆積するものである。それぞれ柱痕跡が認められるものと不明瞭なものが存在し、2・3においては底面に明瞭な当たり痕跡が認められるものと不明瞭なものが存在する。

第10号ピットの覆土中から須恵器甕口縁部と土師器杯底部が、第58号ピットの覆土中から須恵器杯が、第111号ピットの覆土中から土師器杯が検出されている。それぞれのピットは1及び2の範疇に対比できる。また、断面形や覆土の状態から、2は今回検出された奈良・平安時代の堅穴建物跡、3は縄文時代の堅穴建物跡の柱穴にやや類似するが、時期決定には至っていない。

上記の分類により検出されたすべてのピットの大別を試みたが、1及び2、2及び3間において判別しづらいものが多く、すべてのピットの分類には至らなかった。それぞれの詳細は計測表にまとめた。なお、P32・57・67・73・76・78は欠番である。

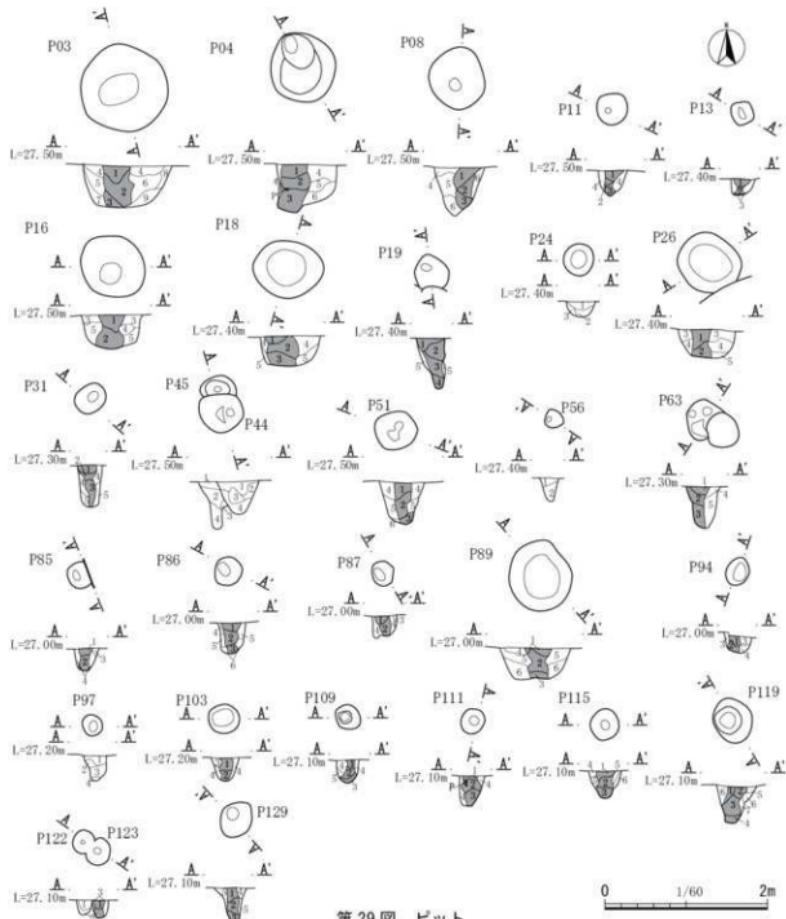
遺物 3は網雲母片岩(筑波石)を素材とする長方形板状に加工された石製品である。用途・機能は判断できない。3は「くすべ焼き」の須恵器甕。6は土師器・非クロ口杯であるが、内面はミガキが施されていない。



第28図 土坑・ピット出土遺物

第22表 土坑・ピット出土土器観察表

遺物名 測量番号	日記	種類	器種	現存	口径	深高	底径	重量	胎土	成・整形の特徴	色調	備考
S803 1	S803-1基	灰釉陶器	甕	口縁1/8~全体 部	13.8	(2.1)	—	9.9	白・黒	口縁端部如意形 内面底付周毛刷 り	358.2灰白 輪: 107.2灰 白	東海産
S803 2	S803-1基	灰釉陶器	甕	口縁1/8~全体 部	13.0	(3.1)	—	9.5	白・黒・透	外表面粗薄い、内 面磨拭	2,530.1灰白 輪: 2,557.2灰 白	東海産
P10 3	P10-1基	須恵器	甕	口縁部	(20.0)	(3.0)	—	20.7	白・赤・透・黄・ 砂	口縁端部折り返し 外: 黒 内: 2,504.2黄 (くすべ焼き) 断: 7.0mm 5/4に 沿・焼	軟質・羅元燒成 (くすべ焼き)	
P10 4	P10-1基	土師器	杯	底部1/4が残存	—	(1.6)	6.0	50.8	骨質・黒質・白・赤・ 外表面底付周毛刷 り	2,530.6灰赤燒 成		
P58 5	P58-1基	須恵器	甕	口縁~底部1/5	(12.8)	4.0	(8.0)	33.2	白・赤・透・黄	外表面底付周毛刷 り、底面不均整 多方向ケズリ	軟質・羅元燒成 輪: 103.4/1 灰 灰	
P11 6	P11-1基	土師器	杯	口縁~底部1/4	(10.9)	3.5	(6.8)	33.9	骨質・赤 (～5mm) ・透	外表面底付ケズ リ、底面ケズリ	358.7赤相	



第29図 ピット

P03

1層 10Y3/4暗褐色土ロームブロック 1～5mm多量地化土粒子ブロック 1～2mm微量暗褐色土ブロック 5～10mm中量ややありやや粘性あり

2層 10Y3/4暗褐色土ロームブロック 1～15mm地化土粒子ブロック 1～3mm微量暗褐色土ブロック 10～20mm少量ややありやや粘性あり

3層 10Y3/4暗褐色土ロームブロック 1～3mm多量暗褐色土ブロック 5～10mm中量ややありやや粘性あり

4層 10Y3/4暗褐色土ロームブロック 1～5mm暗褐色土ブロック 10～20mm中量以上ありやや粘性あり

5層 10Y3/4暗褐色土ロームブロック 1～5mm多量地化土粒子ブロック 1～3mm少量暗褐色土ブロック 5～10mm中量以上ありやや粘性あり

6層 10Y3/4暗褐色土ロームブロック 1～10mm多量地化ブロック 1～10mm中量以上ありやや粘性あり

7層 10Y3/4暗褐色土ロームブロック 1～15mm暗褐色土ブロック 5～10mm中量以上ありやや粘性あり

りありやや粘性あり

8層 10Y3/4暗褐色土ロームブロック 1～15mm多量地化土ブロック 5～15mm中量以上ありやや粘性あり

9層 10Y3/4暗褐色土ロームブロック 1～5mm多量地化ブロック 1～5mm微量暗褐色土ブロック 5～15mm中量以上ありやや粘性あり

P04

1層 10Y3/4暗褐色土ロームブロック 1～10mm多量暗褐色土ブロック 10～30mm少量ややありやや粘性あり

2層 10Y3/4暗褐色土ロームブロック 1～10mm多量地化ブロック 1～5mm微量暗褐色土ブロック 5～20mm中量以上ありやや粘性あり

3層 10Y3/4暗褐色土ロームブロック 1～5mm多量地化ブロック 1～5mm微量暗褐色土ブロック 20～30mm中量以上ありやや粘性あり

4層 10Y3/4暗褐色土ロームブロック 1～20mm多量地化ブロック 1～10mm中量以上ありやや粘性あり

5 10kg/10kg×10袋 花咲色セラムブロック1~5mm多葉緑褐色土ブロック 10~20mm多量
2袋 10kg/10kg×10袋 花咲色セラムブロック1~15mm多葉緑褐色土ブロック5~10mm少葉緑褐色土
さやかにやや緑色あり
6 袋 10kg/10kg×10袋 花咲色セラムブロック1~30mm多葉緑褐色土ブロック 10~20mm多量
花咲色セラムブロック5~15mm中葉緑褐色土
さやかにやや緑色あり

172

1層 10tU4堆積褐色土・ロームブロック 1～15 mm多量堆積褐色土ブロック 20～40 mm中 量や少ないうるさく性あり	1層 10tU4堆積褐色土・ロームブロック 1～3 mm多量堆積褐色土ブロック 5～10 mm多量 や少ないうるさく性あり
2層 10tU4堆積褐色土・ロームブロック 1～20 mm多量堆積褐色土ブロック 5～15 mm少 量や少ないうるさく性あり	2層 10tU4堆積褐色土・ロームブロック 1～3 mm中量堆積褐色土ブロック 10～20 mm中 量や少ないうるさく性あり
3層 10tU4堆積褐色土・ロームブロック 1～15 mm多量堆積褐色土ブロック 10～20 mm少 量疊りありや少ないうるさく性あり	3層 10tU4堆積褐色土・ロームブロック 1～5 mm少量堆積褐色土ブロック 5～20 mm多量 や少ないうるさく性あり
4層 10tU4堆積褐色土・ロームブロック 1～10 mm多量堆積褐色土ブロック 5～10 mm多量 疊りありや少ないうるさく性あり	4層 10tU4堆積褐色土・ロームブロック 1～15 mm多量堆積褐色土ブロック 10～30 mm厚 疊りありや少ないうるさく性あり
5層 10tU4堆積褐色土・ロームブロック 1～20 mm多量堆積褐色土ブロック 5～10 mm多 量疊りありや少ないうるさく性あり	5層 10tU4堆積褐色土・ロームブロック 1～15 mm多量堆積褐色土ブロック 5～10 mm多 量疊りありや少ないうるさく性あり
6層 10tU4堆積褐色土・ロームブロック 1～30 mm多量堆積褐色土ブロック 5～15 mm少 量P3	

10

P11		
1層 10W2/3 黒褐色土ロームブロック 1～20 mm 多量固化ブロック 3～5 mm 廃棄黒褐色土ブロック 5～10 mm 砂や砂やアセチル性あり	やややややややや性あり	
2 層 10W2/2 黒褐色土ロームブロック 1～3 mm 多量固化ブロック 1～2 mm 廃棄黒褐色土ブロック 5～10 mm 砂や砂やアセチル性あり	やややややや性あり	
3 層 10W2/2 黒褐色土ロームブロック 1～3 mm 多量固化ブロック 1～3 mm 廃棄黒褐色土エビコッタ 5～10 mm 砂や砂やアセチル性あり	やややややや性あり	
4 層 10W2/2 黒褐色土ロームブロック 1～15 mm 多量黒褐色土ブロック 10～30 mm 多量砂よりやややや性あり	やややややや性あり	
5 層 10W2/2 黑褐色土ロームブロック 1～20 mm 多量黒褐色土ブロック 5～10 mm 多量砂よりややや性あり	やややややや性あり	

P13

2種 100%黒毛色ロームブロック1~20 mm多量暗褐色土ブロック5~20 mm少量
緑藻ありやべや粘性土性あり

2種 100%黒毛色ロームブロック1~20 mm多量暗褐色土ブロック10~20 mm少
量緑藻ありやべや粘性土性あり

2種 100%黒毛色ロームブロック1~30 mm多量暗黒色土ブロック10~40 mm中
量緑藻ありやべや粘性土性あり

2種 100%黒毛色ロームブロック1~30 mm多量暗黒色土ブロック10~40 mm中
量緑藻ありやべや粘性土性あり

P26

1層 10HE/4暗褐色土ロームブロック1～15mm多量強化ブロック1～5mm重量塔塔
セメントブロック10～20mm量適度にやわらか性あり

2層 10HE/4暗褐色土ロームブロック1～10mm多量暗褐色土ブロック10～30mm塔
セメント強度ありやわらか性あり

3層 10HE/4暗褐色土ロームブロック1～10mm多量暗褐色土ブロック5～15mm少量
セメント強度ありやわらか性あり

4層 10HE/4暗褐色土ロームブロック1～15mm多量暗褐色土ブロック20～40mm中
量やわらか性ありやわらか性あり

5層 10HE/4暗褐色土ロームブロック1～30mm多量強化土ブロック10～20mm塔
セメント強度ありやわらか性あり

四

4層 10VVA4 増緑色ロームブロック 1～5m多量暗緑色土ブロック 5～10m少量
3層 10VVA4 増緑色ロームブロック 1～10m多量暗緑色土ブロック 5～10m既
量緑色よりやや緑色あり
5層 10VVA4 増緑色ロームブロック 1～15m多量暗緑色土ブロック 10～20m少
量緑色よりやや緑色あり
4層 10VVA4 増緑色ロームブロック 1～20m多量暗緑色土ブロック 5～20m少
量緑色よりやや緑色あり

一三

33

5層 100%4種褐色土・ロームブロック1~5mm多量褐色土ブロック10~20mm多量
縫合ありやや粘土あり
P19
1層 100%4種褐色土・ロームブロック1~5mm多量褐色土ブロック5~15mm多量
縫合ありやや粘土あり

13

2層 10mm/4mm暗褐色土モルブック1~5mm多量暗褐色土モルブック10~40mm中層
1層 10mm/4mm暗褐色土モルブック1~5mm多量暗褐色土モルブック10~40mm中層
中のありやや粘性あり
3層 10mm/4mm暗褐色土モルブック1~5mm多量暗褐色土モルブック10~20mm中層
1層 10mm/4mm暗褐色土モルブック1~5mm多量暗褐色土モルブック5~20mm中層
中のありやや粘性あり
4層 10mm/4mm暗褐色土モルブック1~5mm多量暗褐色土モルブック5~15mm中層
中のありやや粘性あり

18

5種	10層10U4層緑色土ロームブロック1~20mm多量緑色土ブロック5~20mm中 量緑色土ブロック	補正ありやなし粘結性あり
6種	10層10U4層緑色土ロームブロック1~5mm少量緑色土ブロック10~20mm少 量緑色土ブロック	補正ありやなし粘結性あり
7種	10層10U4層緑色土ロームブロック1~5mm少量緑色土ブロック10~20mm少 量緑色土ブロック	補正ありやなし粘結性あり
8種	10層10U4層緑色土ロームブロック1~10mm多量緑色土ブロック10~30mm多 量緑色土ブロック	補正ありやなし粘結性あり

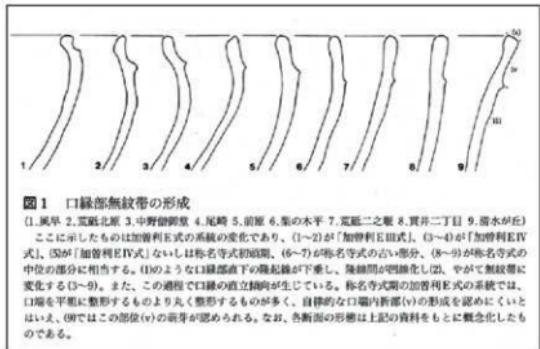


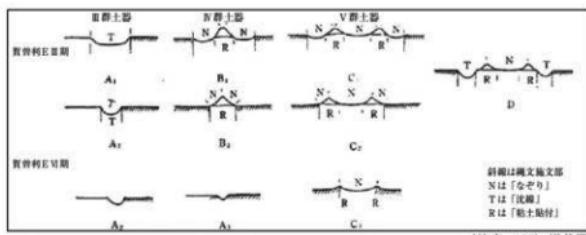
図1 口縁部無紋帶の形成

1. 原始 2. 露底北型 3. 中野館型 4. 桐崎型 5. 前原 6. 茅の木平 7. 鹿島二之瀬型 8. 美井二丁目 9. 清水が丘

ここに示したもののは加曾利E式の系統の変化であり、(1)～(2)が「加曾利EⅢ式」、(3)～(4)が「加曾利EⅣ式」、(5)が「加曾利EⅣ式」ないしは「称名寺式初頭期」、(6)～(7)が「称名寺式の古中期分」、(8)～(9)が「称名寺式の中位の部分に相当する」。(10)のような口縁部直下の櫛起縫が下垂し、隆起間が圓錐化し(2)、やがて無紋帶に変化する(3)～(9)。また、この過程で口縁の直立傾向が生じている。称名寺式兩の加曾利E式の系統では、口端を平面に整形するものより丸く整形するものが多く、目標的な口端内折部(v)の形成を認めにいくとはいえない。(9)ではこの部位(v)の萌芽が認められる。なお、各断面の形態は上記の資料をもとに概念化したものである。

(鈴木 1994)掲載図

第30図 加曾利E式系統の断面形態の標準的な変化



(佐森 1977)掲載図

第31図 加曾利EⅡ期(Ⅲ～V群土器)EⅣ期文様表出手法模式図



第32図 『日本先史土器の繩紋』掲載の土器 (山内 1979)

第3章 まとめー調査の成果と課題ー

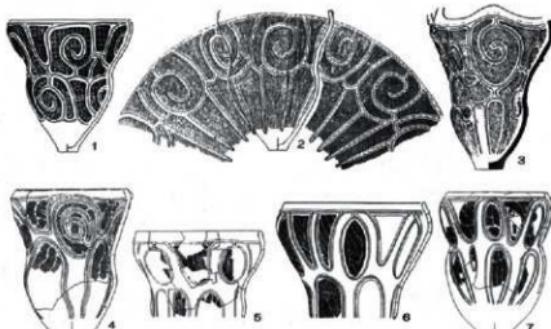
第1節 縄文時代

今回の馬場遺跡の調査及び整理から確認された成果についてまとめると以下のとおりである。

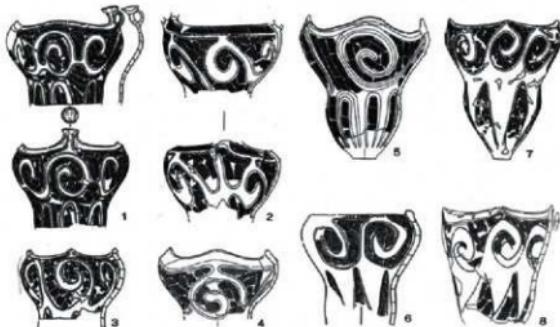
①堅穴建物跡はSI1(加納 1989)の北西約85mに第3号堅穴建物跡(4.9×4.7×深さ0.15m)が位置する。主柱4本、地床炉(45×50×25cm)ほぼ中央東寄り、周溝なし、掘方は浅い。硬化面は部分的に確認した。主軸方向はN-138°-Wと推測した。住居構造・規模は概ねSI1に同じく、僅かな貝類の堆積を記しておく。住居の時期は加曾利E III式新段階でSI1と同時期と判断した。

②積極的に当該期土坑(貯蔵穴・墓壙)は確認できない。

③土器については、散漫な出土状況である。型式論的検討は行い得ていないが早期田戸式・前期黒浜式・中期後半加曾利E III・IV式・後期加曾利B 1式が出土した。加納実(加納 2000)を検討した西野雅人(西野 2008)は「第二は、集落分析のための土器細別と時期区分の検討である。拠点集落群の消滅と新たな非居住域での分散居住の開始の時期はどこまで同時期といえるか。横位連携弧線文系・意匠充填系土器の使用開始が、拠点集落とそれ以外で同時であるのかどうかへ略～」と課題にした。集合的居住の崩壊がより進行してゆく過程の渦中にあると目される馬場遺跡の調査整理では横位連携弧線文系・意匠充填系土器の課題は未明のままである。詳細な検討の必要性と多くの課題を残している。ここでは中期後半土器分析のテキスト(準拠枠)を掲載今後の備えとしよう(佐森 1977、鈴木 1990・1994・2013、山内 1979)。



1～3 加曾利E III, 4 加曾利E III新, 5～6 加曾利E IV, 7 加曾利E V直前(鈴木 2013)掲載図改変
第33図 梶山類型(隆線系)の変化



1～5 加曾利 E III, 6 加曾利 E IV, 7 加曾利 E V, 8 加曾利 E V 新（鈴木 2013）掲載図改変

第34図 梶山類型（沈線系）の変化

④土製品は、呪術的製品ではなく土器片錐・土製円盤に限られる。

⑤石器は、臨機的様相を呈する磨石類で鬼怒川水系と海岸漂着系石材であろう。剥片は高原山産系である。石錐・石皿の出土はない。

⑥第3号竪穴建物跡屋内炉西側1mに位置するP 18確認面の貝堆積（廃棄ブロック）を調査した。貝種はイボキサゴ・ハマグリ（小形）・アサリ（幼貝）・オキアリ、イボニシ・ウミニナ科を採取（混獲か）。A。調理（汁出か）、B。食事、C。屋内空間利用・屋内廃棄・破碎貝、D。A～D一連の行為を想起することができる。A：直接か分配か・採取圧（弊害）発生しているのか。B：一度か繰り足しか。C：一家族の食事か。D：臨機的廃棄行為か、恒常的行為か。溜まれば屋外廃棄するのか。採集（環境領域）。調理、加工（生業領域）。住人の空間利用、小規模（社会領域）に関連する暮らしの一端をひきだした。（西田 2001）は、縄文社会の安定性維持に関わる重要な事項3つの事項のひとつ「小規模社会」をあげる。「素朴社会の日常的な集団規模が数十人程度で親密な個体間関係を維持できるのはせいぜいその程度の集団サイズであるのだろう。小規模な集団で生きることは、不満や誤解による社会的不和の発生を防止することにきわめて有効であるに違いなく、基本的な安心感を与えるのだろう。また、過剰な狩猟や採集によって、あるいは人口の増加によって自然の再生産力を乱すなら、自らの存続が危くなることは直ちに了解できる条件である。縄文社会の生存システムの関係性を調整しながら吸収する多様な調整能力を備えた社会」。個別的事象の積み上げと背景を見誤ってはならないと思う。

⑦汐田川谷（西野 1999）が分岐、宮野木支谷と園生支谷に挟まれた標高25m～28mの台地上に本遺跡が占地する（加納 1995・田中 2007）。北総回廊（田村 2007）を挟んでH群印旛沼低地南西部／E群花見川低地－汐田川谷－（都川低地）という地理的景観（共益圈）を呈している。印旛沼水系である〔勝田川谷流域〕・内野第1遺跡・〔呼称未定支谷〕・古和清水遺跡・〔宮野木支谷〕・小中台遺跡群の南北ルートに注視している。小規模集落（西野 2008・鈴木 1997）が点在する小中台周辺中期末の住居構造一覧に示す。

第24表 小中台周辺中期の住居構造一覧

道路(年次)	住居No.	平面形	規模 n	SI	柱穴	その他の柱穴	周溝	U形地・規模・長軸・短軸・深さ (m×cm)	時期	
小中台 (87)	1	楕円方形	5.0 × 4.8 × 0.35		床面中央	9		無	昭 E B	
	2	楕円方形	3.73 × 3.35 × 0.15		中央北竪溝	6	埋甃 (P13) 4	なし	昭 E B	
小中台 (2)	3	楕丸形	4.8 × 4.7 × 0.20 ~ 0.30		床面中央	4	埋甃	(土22片) 64 : 53 × 42 × 37 64 : 83 × 78 × 40	加 E B	
新駁込 (89)	4	楕丸形	4.2 × 4.1 × ~		床面中央	7	10	なし	加 E B	
	5	不整円形	4.3 × 4.1 × 0.10 ~ 0.20		床面中央	7	10	なし	加 E B	
	6	不整円形	4.4 × 3.9 × 0.15 ~ 0.30		中央北竪溝	7	13	なし	加 E B	
	7	不整円形	5.3 × 4.6 × 0.15		床面中央	6 (7)	23	なし	加 E B	
	8	不整円形	5.3 × 4.6 × 0.15		床面中央	6 (7)	17	一基	加 E B	
小中台 (90)	1	円形	4.6 × 0.36			6		あり 計画住居 4.76	加 E B	
	2	円形	4.56 × 0.14		中央	13		SI : 0.60 × 0.56 × 0.36	加 E B	
	3	円形	5.60 × 0.32		中央 2 畳	29	あり	SI : 0.72 × 0.64 × 0.36 SI : 0.90 × 0.64 × 0.36	加 E B	
	4	長楕円形	0.76 × 5.12		中央東竪溝	29	なし	SI : 0.80 × 0.76 × 0.36	加 E B	
小中台 A (97)	1	楕円形	4.2 × 3.1 × 0.00		日出納北竪溝	7	6	なし	加 E B	
馬廻 (86)	1	不整円形	0.8 × 4.9 × 0.50		床面中央	4 (5)	出入口 4 基	なし	加 E B	
馬廻 (99)	1	不整円形	4.9 × 4.7 × 0.15		床面中央	4	30	なし	SI : 0.45 × 0.50 × 0.25	加 E B
東南道原第2 (98)	1	不整円形	5.4 × 2.24 × 0.29		西壁竪溝	6	なし	SI : 0.70 × 0.67 × 0.33	加 E B	
	2	円形	5.55 × 2.91 × 0.13		中央	13	なし	SI : 1.15 × 1.00 × 0.29	加 E B	
	3	円形	2.95 × 0.72 × 0.46					SI : 0.58 × 0.56 × 0.35	加 E B ~ 離	
	4	不明			中央			SI : レンジ	加 E B	
岩野木原第2 (95)	1	不明						物名寺		
孤塚西 (90)	1	円形?	3.3 × 0.10							
	2	不整椭円形	4.5 × 4.1 × 0.30		中央南	柱穴は壁に沿う		SI : 80 × 61 × 20	物名寺	
馬廻保 (89)	1	不整円形	5.0 × 2.75 × 0.10		日出納中央	埋甃穴 6	なし	SI : 50 × 45 × 40	加 E B	
	2	不整形	3.0 × 2.5 × 0.15		中央	埋甃穴 6	なし	SI : 円形 55 × 30	加 E B	
	3	不整椭円形	3.1 × 2.6 × 0.10		中央西	4 (6)	なし	SI : 円形 60 × 30	加 E B	
	5	円形	2.6 × 2.5 × 0.10		なし	4			加 E B	
牛尾村 (97)	1	円形	5.6 × 6.0 × 0.45		中央・南×2	30	埋甃穴 6	あり 1号土器群SI : 75 × 55 × ~ 2号SI : 41 × 49 × 4 2号SI : 56 × 47 × 2	加 E B	
	2	円形?			中央	8		埋甃 : SI : 69 × 48 × 4	加 E B	
	3				中央	9		SI : 棚口 : 55 × 3	加 E B	
	4	円形	7 × 6.5 × 0.1		中央	7		SI : 140 × 93.5 × 27	加 E B	
	5	楕円形	5.8 × 5.2 × 0.08		中央北竪溝	9		SI : 68 × 64 × 22	加 E B	
	6	楕円形	6 × 0.3		中央	10		SI : 55 × 15	加 E B	
	7	不明					あり	SI : 58 × 12	加 E B	
	8	不明			北側	9		SI : 68 × 67 × 20	加 E B	
	9	楕丸形			中央	4	周溝内 2	あり	SI : 81 × 75 × 26	加 E B
	10	不明			中央	10		SI : 91 × 68 × 18	加 E B ?	
	11	楕円形	6.6 × 6.1		中央西	7		SI : 97 × 69 × 22	加 E B	
	12	円形	4.9 × 4.7 × 0.1		中央と北側	なし	周溝内 1	あり 1号土器群SI : 107 × 99 × 29 2号SI : 85 × 74 × 13	加 E B	
	13	楕円形	5.9 × 0.2		中央東竪溝	1		SI : 136 × 123 × 21	加 E B	
	14	円形	7.3		中央やや北	5		SI : 96 × 63 × 23	加 E B	
	15	円形	5.4 × 0.2		中央	8		SI : 105 × 93 × 44	加 E B	
	16	楕円形	3.4 × 3.1 × 0.3		中央	4		SI : 73 × 66 × 36	加 E B	
	17	円形	2.1 × 2.0 × 0.3		中央	8		あり SI : 151 × 113 × 31	加 E B	

第2節 古墳時代～奈良・平安時代

今回の調査は昭和62年度の県調査地点(以下、「62県調査」と略記。)の隣接地であり、調査成果もその延長上で理解できる。古墳時代の遺構の確認には至らなかったが、奈良時代の竪穴建物跡から一定量の土器の出土を見た。したがって、遺跡の消長もその範囲内に収まるものであったが、今回の調査では9世紀前半の竪穴建物跡と掘立柱建物跡を新たに確認して、8世紀中葉から9世紀後半に至る本遺跡集落の連続性を知ることになった。

集落の変遷 62県調査では、古墳時代後期は6世紀中葉と7世紀前葉の竪穴建物跡を各1軒確認していた。今回の調査では8世紀後半の第1号竪穴建物跡の埋没覆土に含まれていた土器片を検出したに過ぎない。同建物跡は調査区北西端で、62県調査の古墳時代建物跡SI 6・7とは40mほど離れた位置にある。つまり、今回検出した古墳時代後期の土器は、さらに北側に予測される建物跡に由来す

るものと推察する。したがって、本遺跡における同時期の集落範囲は今回の調査地点の北側に広がる可能性があると考える。

本遺跡集落跡の中核は奈良時代後半(8世紀中葉)から平安時代前期(9世紀後葉)に至る時期である。62県調査では9世紀前半の建物跡は確認されていなかったものの、黒窓14号窓式の灰釉陶器の存在から、9世紀前葉の集落消長を予察していた。今回の調査地点において9世紀前半の竪穴建物跡2軒と掘立柱建物跡1棟が確認され、奈良・平安集落の継続を明確にすることとなった。ところで、当該期集落は竪穴建物跡の分布密度が著しく低い印象を受ける。近在では本遺跡から700m南東にある下田遺跡(園生支谷。倉田1998)において7,420m²が発掘調査され、8世紀後半を盛期とする集落跡が明らかにされている。そのうち8~9世紀に帰属するものは56軒に上るが、各時期の竪穴建物跡の分布密度は同程度とみなすことができた。62年調査の報告書に言うとおり、発掘調査によって見えているのは当時の集落跡のほんの一部であり、集落範囲や構造、その消長については今後の調査に期するところが大きい。

遺構では、掘立柱建物跡(2間×2間)が本遺跡では初めて確認された。前出の下田遺跡では同建物跡が複数確認されており(時期が判明するものは9世紀前半か)、同様の2間×2間のものも見られる。掘立柱建物と竪穴建物の関連は、今後の調査の進展を待つこととしたい。

土器の様相 奈良・平安時代の当地域の土器、特に煮炊具(甕・瓶類)については、本市中央区の鷺谷津遺跡の調査報告書の中で、田中 裕氏が土器分類と編年を提示されている(田中・白井2002)。I群(甕・瓶類の“多くが土師器で構成”される土器群)とII群(“多くが須恵器で構成”)に大別し、前者は古墳時代後期後半(7世紀)~奈良時代に相当する時期、後者は平安時代とする。II群は前半の「圧倒的多数の千葉産須恵器によって土師器甕がほぼ駆逐される段階」と後半の「須恵器甕が比較的少なくなる段階」に分けられる。同文では絶対年代の比定に言及していないが、II群前半、つまり「II-1期・2期」が9世紀に相当すると推察される。

しかし、ここで明示されている千葉産須恵器の甕・瓶類は、折り返し口縁の平底甕・瓶であって、その他の軟質・酸化焼成の須恵器甕類と土師器甕類(房縦型)との分離が明確ではない。今回の報告にあたっては、62年調査報告書(萩原編1989)における萩原恭一氏の説明に従い、軟質・酸化焼成(表面は黒化して断面・器壁内部は酸化色を呈する。「くすべ焼き」と称されるものもある。叩き成形などの須恵器技法が用いられる。)の甕を在地産の「須恵器」として、土師器甕とは分離した。

こうした理解に基づくと、9世紀前半に位置づけられる第4・第5竪穴建物跡出土土器では搬入品の武藏型甕を含め、在地産の土師器甕が煮炊具の多数を占めているようである。比率については、「軟質・酸化焼成」の須恵器の認識に時間がかかったので分類・算出できていない。大雜把ではあるが、掲載遺物にもある程度の傾向が表れていると思う。次の9世紀後葉の第2号竪穴建物跡出土土器では、軟質・酸化焼成須恵器甕が土師器甕を圧倒している。

しかし、この軟質・酸化焼成須恵器について、物によっては硬質な焼き上がりであったり、還元色を呈していたりするので(第2号竪穴建物跡の9)、適切な名称とは言えない。また、直接的な関係は不明であるが、土師器の常縦型甕の肩部には叩き成形法が用いられるという面もある(第1号竪穴建物跡の7。大賀2013)。さらに、胎土は何種類かあり、生産窯がそれに対応していると推定されるが、「千葉産須恵器」としての明確な分類と定義、認識の共有をした上で土器群資料の分析にあたらねばならない。今回の報告では、その実施に至らなかったことを明記しておきたい。

参考文献

縄文時代

- 岡田光弘 1986『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書』II 財団法人 千葉県文化財センター
小澤政彦・加納 実・西野雅人ほか 2019『千葉市跡ヶ崎遺跡』千葉市教育委員会
加納 実・荻原恭一・古宮 马 1989『千葉市小中台(2)遺跡・新堀込遺跡・馬場遺跡』千葉県文化財センター調査報告第160集
財団法人千葉県文化財センター
加納 実 1989『千葉県における加曾利E式土器後半の様相』『第3回縄文セミナー・縄文中期の諸問題』群馬県考古学研究所
加納 実 1994『加曾利E III・IV式土器の系統分析一配列・編年との関連として』『貝塚博物館紀要』第21号 千葉市立加曾利貝塚博物館
加納 実 1995『下総台地における加曾利E III式期の諸問題—集落の成立に関する予察を中心に—』『研究紀要16』財団法人千葉県文化財センター
加納 実 2000『集合的居住の崩壊と再編成—縄文中・後期集落への接近方法—』『先史考古学論集9』
加納 実 2013『中期末・後期初頭における東西関係について』『「完新世の気候変動と縄文文化の変化」公開シンポジウム予稿集』
『関東甲信越地方における中期／後期変動期：4・3ka イベントに関する考古学現象③』
菊池健一 1990『千葉市小中台遺跡』財団法人千葉県文化財調査協会
小林 崇 2019『千葉市東海道遺跡』公益財団法人 千葉市教育振興財団
斎藤弘道 1996『東関東の様相』『第9回縄文セミナー・後期中葉の諸様相』縄文セミナーの会
後森健一 1977『前島・島之上・出口・芝山』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第12集 埼玉県教育委員会
縄文セミナーの会 2007『第2回縄文セミナー・中期終末から後期初頭の再検討』
鈴木次郎 1977『2 節 石器 2 磨石類『尾崎遺跡 濱川組合開発計画に伴う調査』神奈川県埋蔵文化財調査報告13 神奈川県教育委員会
鈴木徳雄 1990『称名寺式土器』『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
鈴木徳雄 1994『称名寺式の形制と施文域—一文模構成の地域的伝統と型式変化—』『東海大学校地内遺跡調査報告4』東海大学校地内遺跡調査委員会
鈴木徳雄 1997『第VI章尻玉郡における縄文集落の占地と居住形態—関東内陸部の縄文時代遺跡の遷移（予察）—』『将監塚東・平塚・藤塚遺跡—縄文時代編—』尻玉町文化財調査報告書 第20集 埼玉県尻玉郡尻玉町教育委員会
鈴木徳雄 2013『称名寺式前後の土器の存在形態と変化—土器系統の存在形態と器種の推移—』『「完新世の気候変動と縄文文化の変化」公開シンポジウム予稿集』『関東甲信越地方における中期／後期変動期：4・3ka イベントに関する考古学現象③』
鈴木徳雄 2013『地域の様相 三 関東地方』『講座日本の考古学3 縄文時代（上）』青木書店
鈴木正博 1981『遺物特論II—「加曾利B式（古）」研究序説—』『取手と先史文化—中妻貝塚の研究一下巻』取手市立文書館
宍倉昭一郎ほか 1995『縄文人の海と貝塚東ノ上（西）貝塚発掘調査結果抄録』關生貝塚研究会編 筑波書房
田中英世・梁瀬裕一 1987『子と清水遺跡』千葉市子和清水遺跡・房地遺跡・一枚田遺跡 千葉市教育委員会 財団法人 千葉市文化財調査協会
田中英世 2007『千葉市小中台A遺跡』財団法人千葉市教育振興財団埋蔵文化財センター
中山貴正 2005『宮野木原第2遺跡』『埋蔵文化財調査（市内遺跡）報告書』一平成16年度 千葉市教育委員会
西田正規 2001『「縄文時代の安定社会」』『国立歴史民俗博物館研究報告「共同研究」日本歴史における労働と自然 離原 敦編』
第87集 国立歴史民俗博物館
西野雅人 1999『千葉県内貝塚分布地図地名表』『研究紀要19』財団法人千葉県文化財センター
西野雅人 2008『縄文中期拠点集落の消滅と小規模集落』『千葉縄文研究』2 千葉縄文研究会
新田浩三・山田貴久 1987『千葉市小中台遺跡』財団法人 千葉県文化財センター
橋本勝雄 2014『3 石器』『第3章第2節軽石製品について』『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書 柏市富士見遺跡 縄文時代以降編1』千葉県教育振興財団調査報告第728集 公益財団法人千葉県教育振興財団文化財センター
橋本勝雄 2016『(3) 石器石材』『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書 柏市大松遺跡 縄文時代以降編2』千葉県教育振興財団調査報告第754集 公益財団法人千葉県教育振興財団文化財センター
飛田正美 1997『千葉市小中台A遺跡・牛尾外遺跡発掘調査報告書』財団法人 千葉市文化財調査協会
山内清男 1979『日本先史土器の縄文』先史考古学会
山下亮介 1990『千葉市猿塚西遺跡』財団法人 千葉市文化財調査協会
横田正美 1989『千葉市馬場塚遺跡』財団法人 千葉市文化財調査協会

奈良・平安時代

- 大賀 健・大賀さつき 2013 「叩き手法を用いる『常縦型甕』についての一考察」大越直樹・鈴木 敏編『下坂田塙台遺跡・坂田塙台古墳群』—県営畠地帯総合整備事業（担い手型）坂田地区埋蔵文化財発掘調査報告書— （有）勾玉工房 Mogi 編、土浦市教育委員会
- 倉田義広 1998『千葉市下田道路』 ダイア建設（株）・（財）千葉市文化財調査協会
- 小林 富・西野雅人 2016『千葉市宮野木第2遺跡』一長屋住宅建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—（公財）千葉市教育振興財團編・清宮正雄
- 小林 崇編 2019『千葉市東海道遺跡（第2次）』一宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書—（株）フレスコ・（公財）千葉市教育振興財團
- 齊藤孝正 2000『越州窯青磁と縁袖・灰釉陶器』日本の美術第409号 至文堂
- 齊藤孝正・後藤建一編 1995『須恵器集成図録』第3巻 東日本編 I 雄山閣出版
- 鈴木敏則 2006「東海産須恵器の流通—湖西窯を中心に」『古代武藏國の須恵器流通と地域社会』埼玉考古別冊9 埼玉考古学会 50周年記念シンポジウム発表要旨・資料集 埼玉考古学会
- 鈴木敏則 2011「須恵器の編年—東日本」福永伸哉ほか編『古墳時代の考古学』第1巻 古墳時代史の枠組み 同成社
- 田中 翔・白井久美子 2002「古墳時代から平安時代の土器」田中編『千葉市鷺谷津道路』一都市基盤整備公団・（財）千葉県文化財センター
- 飛田正美編 1997『千葉市小中台A遺跡・牛尾舛遺跡』千葉市小中台町牛尾舛土地区画整理組合・（財）千葉市文化財調査協会
- 長原 亘編 2019「馬場道路」『埋蔵文化財調査（市内道路）報告書』一平成30年度一 千葉市教育委員会・千葉市埋蔵文化財調査センター
- 萩原恭一編 1989『千葉市小中台（2）遺跡・新堀込遺跡・馬場遺跡』千葉都市計画道路3・4・43号磯辺・茂呂町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3 千葉県文化財センター調査報告書第160集（財）千葉県文化財センター編・千葉県都市部
- 松田礼子 2001「下總国府の土器編年」松本太郎編『下總国府跡』一国府台遺跡緊急確認調査報告書一 市川市教育委員会

写 真 図 版



1. 北区全景（北東から）



2. 中央区全景（北東から）



1. 南区全景（南西から）



2. テストピットAセクション（北西から）



1. SI01 完掘状況（南東から）



2. SI01 Bセクション（東から）



3. SI01 Bセクション（東から）



4. SI01 カマドA・Bセクション（東から）



5. SI01 カマド完掘状況（南東から）



1. SI02 完掘状況（南から）



2. SI02 Bセクション（南東から）



3. SI02 遺物出土状況（南から）



4. SI02 カマドBセクション（南から）



5. SI02 カマド完掘状況（南から）



1. SI03 完掘状況（南西から）



2. SI03 遺物出土状況（南西から）



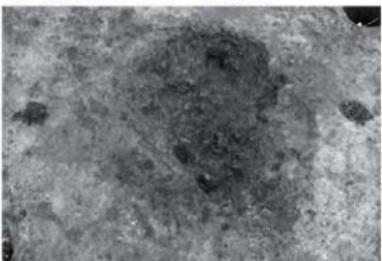
1. SI03 東区 完掘状況（北東から）



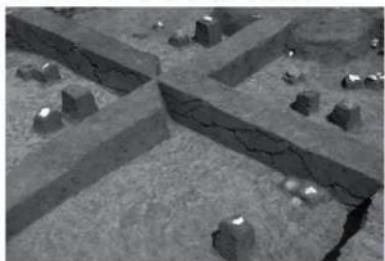
2. SI03 Bセクション（南西から）



3. SI03 炉A・Bセクション（南東から）



4. SI03 炉完掘状況（南西から）



5. SI04 Bセクション（南東から）



6. SI04 焼土検出状況（南から）



7. SI04 カマドAセクション（東から）



8. SI04 カマド遺物出土状況（南から）



1. SI04 完掘状況（南から）



2. SI04 遺物出土状況（南西から）



1. SI05 完掘状況（南西から）



2. SI05Aセクション（北西から）



3. SI05 カマドAセクション（西から）



4. SI05 カマド遺物出土状況（北から）



5. SI05 カマド完掘状況（南から）



1. SB01 完掘状況（北から）



2. SB01 P-01Aセクション（東から）



3. SB01 P-02Aセクション（東から）



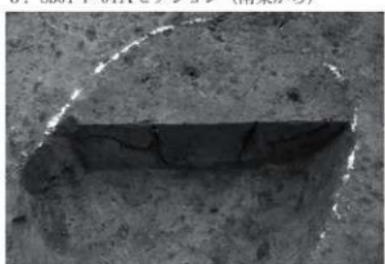
4. SB01 P-03Aセクション（南東から）



5. SB01 P-04Aセクション（南東から）



6. SB01 P-05Aセクション（北東から）



7. SB01 P-06Aセクション（東から）



8. SB01 P-07Aセクション（東から）



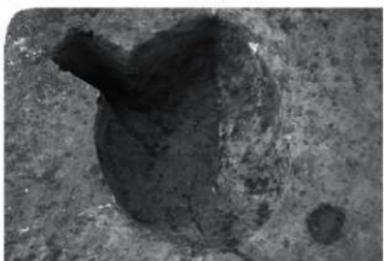
1. SD01 完掘状況（南東から）



2. SD01Aセクション（南東から）



3. SD02 完掘状況（南東から）



4. SK01 完掘状況（東から）



5. SK02Aセクション（北から）



6. SK03 完掘状況（西から）



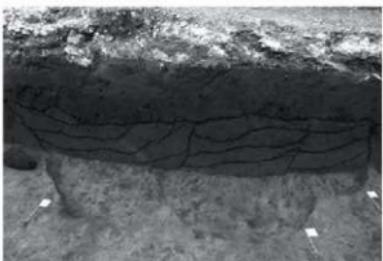
7. SK04 完掘状況（南から）



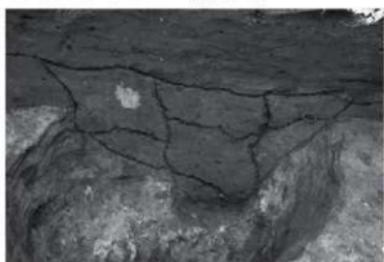
8. SK05Aセクション（南西から）



1. SK06Aセクション（南西から）



2. SK07・08・09Aセクション（南東から）



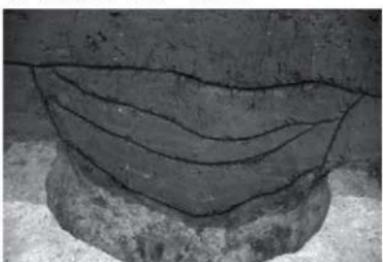
3. SK10Aセクション（南から）



4. SK11Aセクション（北から）



5. SK12Aセクション（南から）



6. SK13Aセクション（南西から）



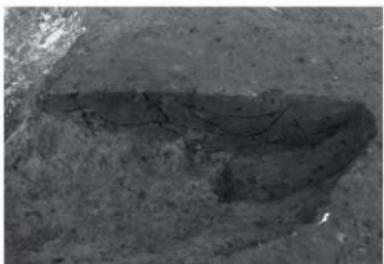
7. SK14Aセクション（南西から）



8. SK15完掘状況（南から）



1. SK16 完掘状況（東から）



2. SK17Aセクション（南から）



3. P03Aセクション（南東から）



4. P04Aセクション（西から）



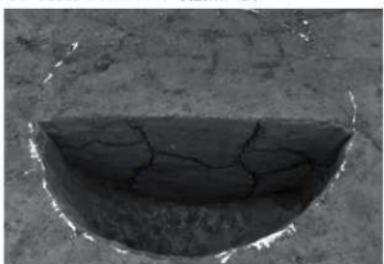
5. P08Aセクション（北西から）



6. P11Aセクション（北西から）



7. P13Aセクション（南西から）



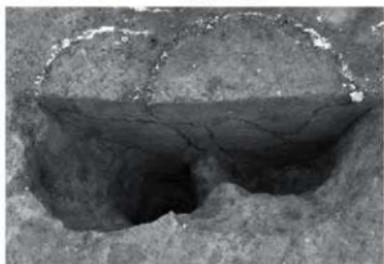
8. P16Aセクション（南西から）



1. P24Aセクション（南西から）



2. P42Aセクション（南西から）



3. P44・45Aセクション（西から）



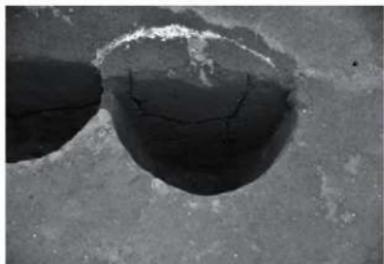
4. P56Aセクション（西から）



5. P77Aセクション（南東から）



6. P115Aセクション（西から）



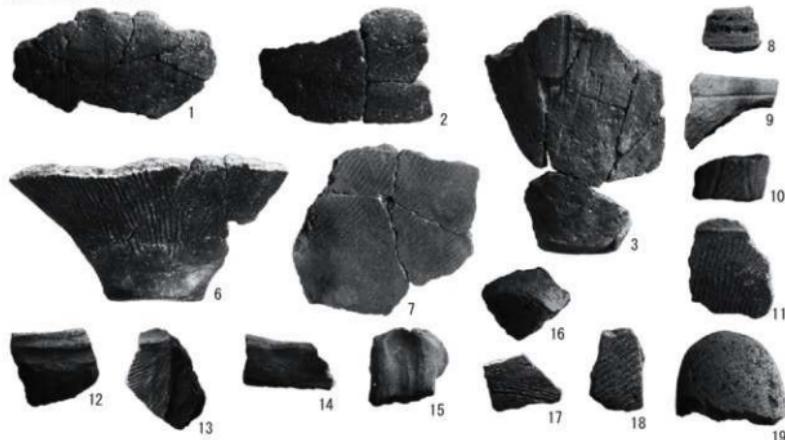
7. P123Aセクション（東から）



8. P129Aセクション（北東から）

縄文時代 出土遺物

第3号堅穴建物跡



遺構外出土遺物



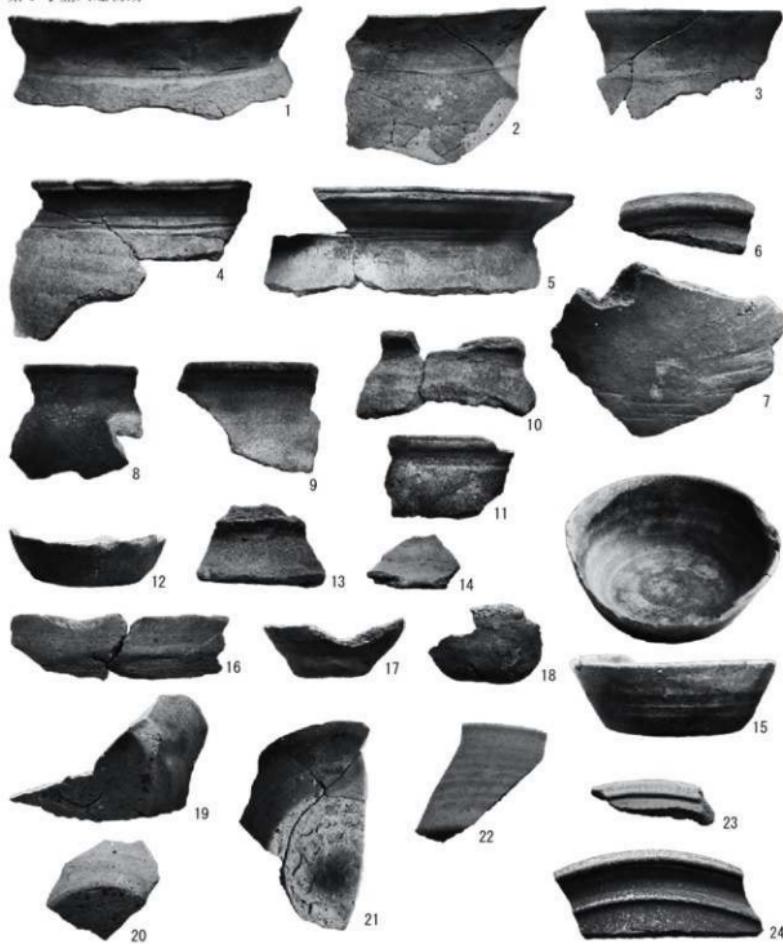
23 * 22・23はS=1/1

古墳・奈良・平安時代 出土遺物

古墳時代遺構外

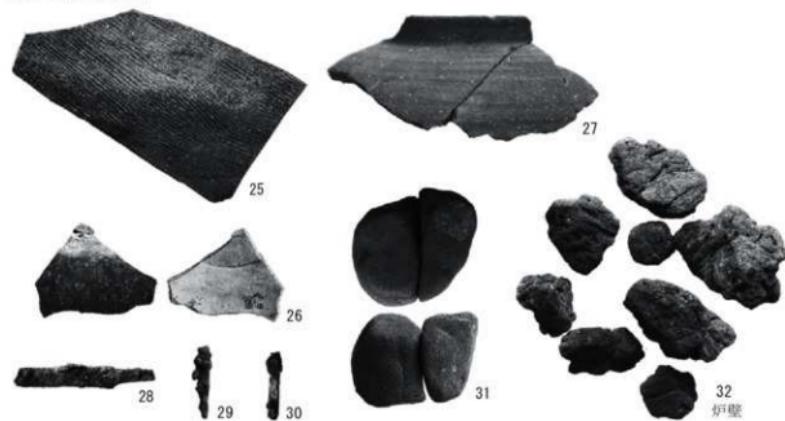


第1号竪穴建物跡

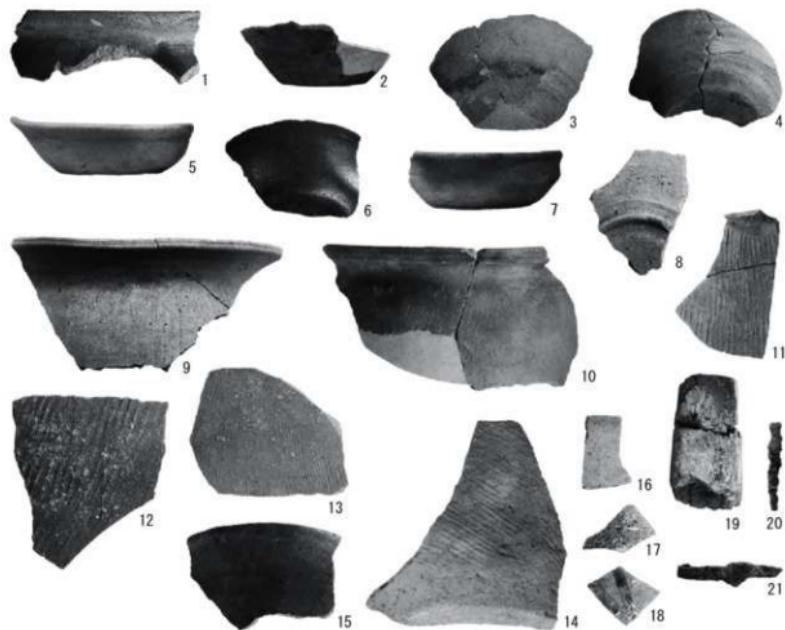


奈良・平安時代 出土遺物

第1号竪穴建物跡



第2号竪穴建物跡



奈良・平安時代 出土遺物

第4号竪穴建物跡



奈良・平安時代、近世 出土遺物

第5号竪穴建物跡



第1号掘立柱建物跡



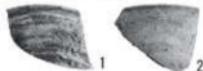
第2号溝跡



近世遺構外出土遺物



第3号土坑



第10号ピット



第58号ピット



第111号ピット



1. 第3号竪穴建物跡出土貝類①



2. 第3号竪穴建物跡出土貝類②

抄 錄

千葉市馬場遺跡（第2次）

宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書

令和元年（2019）9月30日 発行

編集 株式会社ノガミ
〒286-0045 千葉県成田市並木町221
TEL:0476-24-3218

発行 千葉市教育委員会
〒260-0025 千葉市中央区問屋町1-35
TEL:043-245-5962

印刷 株式会社ライフ
〒286-0134 千葉県成田市東和田595
TEL:0476-24-1564